

522

176



始



2A82





ト

坪内逍遙譯

13. 3. 29

購求



Henry Irving.

續
言

「ハムレット」の原名は、詳に譯すれば「デンマークの王子ハムレットの悲壯トラジカルなる傳記ヒストリー」、又は版によりては「デンマークの王子ハムレットの悲劇トラジエディー」とあり。而して明かにシェークスピアの名を署したるものは一六〇二年に初演せられ、其出版せられしは一六〇三年の四つ折本を初めとし、存生中に都合五版を重ねたり。沙翁學者の説によれば、其起稿は、早く

ば一五九八年頃、遅くも一六〇二年以前なるべく、年齢よりいへば、作者が三十四歳以後、三十八歳以前の作なるが如し。但し今日傳はれる普通の「ハムレット」(此譯の本となれる「ハムレット」の如きも其一)は一六〇四年に増補修正せられたるを土臺とし、作者の死後其友人等が出版せる二つ折本中の「ハムレット」を参照して成れる者にて、前にいへる一六〇三年本とは、内容も形式も、共に著しき相違あり。後の「ハムレット」(即ち一六〇四年版)は第一のに比して人性の觀察及び描寫、脚色及び詞藻、何れの方面より見るも際立ちて優れると勿論なると同時に、行數も一千七八百行

も多く、登場人名にも幾らかの相違あり、又齣の順序も同じからざる爲、筋の上にも小少ならぬ差異あり。例へば *Polonius* は第一作には *Corambis* とあり、*Reynaldo* は *Montano* とあり。*Osvic* の名は無くて其代りに *Brayart Gentleman* (大言を吐く殿上人)とあり、又 *Francisco* も只「第一の番卒」とのみ記して名は無し。劇中劇の王と妃とは *Duke Duchess* とありて、名も *Albertus* にて *Gonzago* にあらず。(現行本に此劇中の王と妃とが、ハムレットが白中に、公、公夫人となり居れるは、恐らく第一版の名残などなるべし。)又墓の場の *Yorick* の髑髏は、今の「ハムレット」には、二十三年土中に埋れたりとあれど、十

二年云々とあり、これは例のやかましきハムレットの年齢問題に關係すれば、特に注意すべき價值あり。其他有名なる獨白「*To be or not to be*」及びオフィリヤに對する「尼寺云々」の問答が、第一版にては、ポローニヤスがハムレットの艶書を読む條及び「魚商云々」の問答の條と同じ場となりをれる、乃至劍に毒を塗ることを發案せるはレーヤアチーズにあらずして王なること、及び妃ガアツルードが先王の毒殺に關しては全く與り知らず、ハムレットの苦諫を聽きて後に、共に謀つて復讐せんと約する條及びホレーシオと妃とが内々にてハムレットが不意の歸國に關して協議

する條の添はりをれるなど、何れも注意すべき相違の點なり。

シェークスピアの作以前に(別種の「ハムレット」所謂 *Ur-Hamlet* 原作「ハムレット」)ありしこと乃至其作者の誰たるかに關する推測及び第一の「ハムレット」と件の原作との關係の如きは今は全く論せざることとし、こゝにはハムレット傳説の根源につきて少しく語る所あるべし。

最も古きハムレットの傳記はデンマークの史家 *Saxo Gram-*

maticus が紀元後一二〇四年に拉典文にて著し、一書「丁抹人之史」の第三卷及び第四卷なる *Amellus* の物語なりとぞ。此書は一五一四年に刊行せられき。然るに一五七〇年に至りて佛人 *Balforest* といふ者、右のサクソの原著を殆ど筆任せに佛蘭西文に意譯して其 *Histoires tragiques* と題したる一著の第五卷に收めたり、これには *Amelle* となりをれり。之を英文に譯したるものが *The Historie of Hamlet* にして、其出版は一六〇八年にて都合八章に互る長物語なり。さてシェークスピアは所謂原作「ハムレット」を基礎として其「ハムレット」を作りしか、若しくは直ちに佛文の「ハムレット物語」

に負ふ所ありしかといふ點は、學者の議論まち／＼にして一定せざれど、右の英譯に負ふ所無きとは略明かなり。「ハムレット物語」の英譯は寧ろシェークスピアの作の高評に促されて世に出でしものならんといふ。それはともあれ、右の英譯はフアネス氏の集注「ハムレット」の第二卷に原のまゝに載せられたれば、脚本との主なる異同を示すために、其大筋と緊要なるべき廉々とを左に掲ぐ。

基督教の未だデンマークに入らざりし未開の頃、又英吉利が該國の所領たりし殺伐の時代に、デンマークの王に

Roderick といふがあり、其國土を分割して州となし、州司を置きて之を管せしめたり。州司中に兄弟の者あり、兄を Horvendile 弟を Fenjon と呼べり。海賊業は時の譽れなりしが、Hor. は最も其道に秀でたりき。ノールウェーの王に Colere といふ者あり Hor. の武名を嫉みて單騎格闘せんことを求む。應戦の結果 Col. 敗死し Hor. は敵の財寶滿船を得て歸國し、其の多くを國王ロデリックに献ず。王嘉して其一女 Geruth を Hor. に嫁す。Hamlet は其子なり。Fenjon 兄の名譽を妬みて亡きものにせんと欲し、先づ嫂を誘惑して弑逆を遂ぐ。(宴席にて暗殺し、罪を臣下に嫁す、

毒殺にはあらず)。Hamlet おのが身の危きを悟りて佯狂す。Fen. の黨與之を疑ひ Fen. に勸めて百方探偵せしむ。宮女中に Hamlet に戀慕せるものあり、之を使うて林中にて Hamlet に邂逅せしめ、戀愛に事よせて真意を探らしめんとするとあり。Hamlet と育ちし一紳士窈に計畫を Hamlet に告げて警戒せしむ。Fen. 旅行すと偽りて林中に狩し、其不在中に妃と Hamlet とを一室に會談せしむ。顧問官某、室の垂帳の背に潜みて窺ふ。妃と Hamlet と室に入來る。されど Hamlet は聊も油斷せずして佯狂をつやけ、頻に狂ひ廻り、手もて垂帳を拊ち試む。

何物か動くを覺り、*a rull a rull*と叫びつゝ、劍にて顧問官を刺殺す。寸々に切りて煮て豚に食はしむることなどあり。かくて母を罵り責むる語頗る長し。密談數刻の後、母は弑逆には關係なしと辨疏してハムレットに同心し、秘密を守り、復讐に助力すべしと約す。

Fen. はハムレットを英國に送らんとす。(密書の件、すりかへの件等、すべて沙翁が作の通りなり、只海賊船の一條だけは無し。)かくてハムレットは英國に渡り、*Fen.*の命と詐りて英の公主と婚し、やがて脱走す。時に本國にてはハムレットは既に死にたりと信じて葬儀を執行せる最中なり。

ハムレット夜に乗じて *Fen.* が館に火を放ち、恰も酔臥せる近臣等を焚殺し、同時に *Fen.* が寢室に闖入し、名宣りかけて首と胴とを二分す。

民衆は翌朝に至り焼跡に集り來り、頭足處を異にせる *Fen.* を見て駭く。復讐の旨意を辨じて民衆を鎮撫するハムレットの長演説あり。原本によればハムレットは一個の中の大兄にして果敢勇武の君主なり。人民悦服してハムレットを國君と崇む。ハムレット再び英國に赴きて其の妻を具し歸らんとす。然るに英王に異圖ありてハムレットを殺さんと企つ。ハムレット逆まに英王を殺し、二妃を

て歸國す。叔父に *Wiglerus* といふあり、野心を抱きてハムレットを襲ふ。第二の妃 *Hermelinde* 敵に内應してハムレットを弑し、*Fig.* に嫁す、云々。

シェイクスピアの「ハムレット」に比べて、ハムレットの爲人の著しく異なれるを見るべし。シェイクスピアのは基督教徒にして、かゝる未開時代の武人とは思はれず。又筋の上より見るに、第一の「ハムレット」の方、幾分か此傳説の趣に近し、疑ふらくは所謂原作の「ハムレット」劇は一段と筋に於ても主人公の性格に於ても此傳説に近きものなりしなら

ん。尙此點に關しては、附録せる「ハムレット」とキッドとの關係に就いて、讀者の一考あらんことを望む。

登場人名

デンマーク國王、クローディヤス。

先王の子にして現王の甥たる ハムレット。

ノールウェー王子、フォチンブラス。

侍従長、ポローニヤス。

ハムレットの信友、ホレーシオ。

ポローニヤスの男、レーヤアチーズ。

廷臣、ダルチマンド。

同 コオネリヤス。

同 ローゼンクランツ。
 同 ギルデNSTアアン。
 同 オスリック。
 紳士役一人。
 僧官一人。
 武官(組頭)、マーセラス。
 同 バアナードー。
 兵卒、フランシスコー。
 ポローニヤス家來、レーナルドー。
 俳優若干。
 道外方(墓掘男)二人。
 旗頭一人。

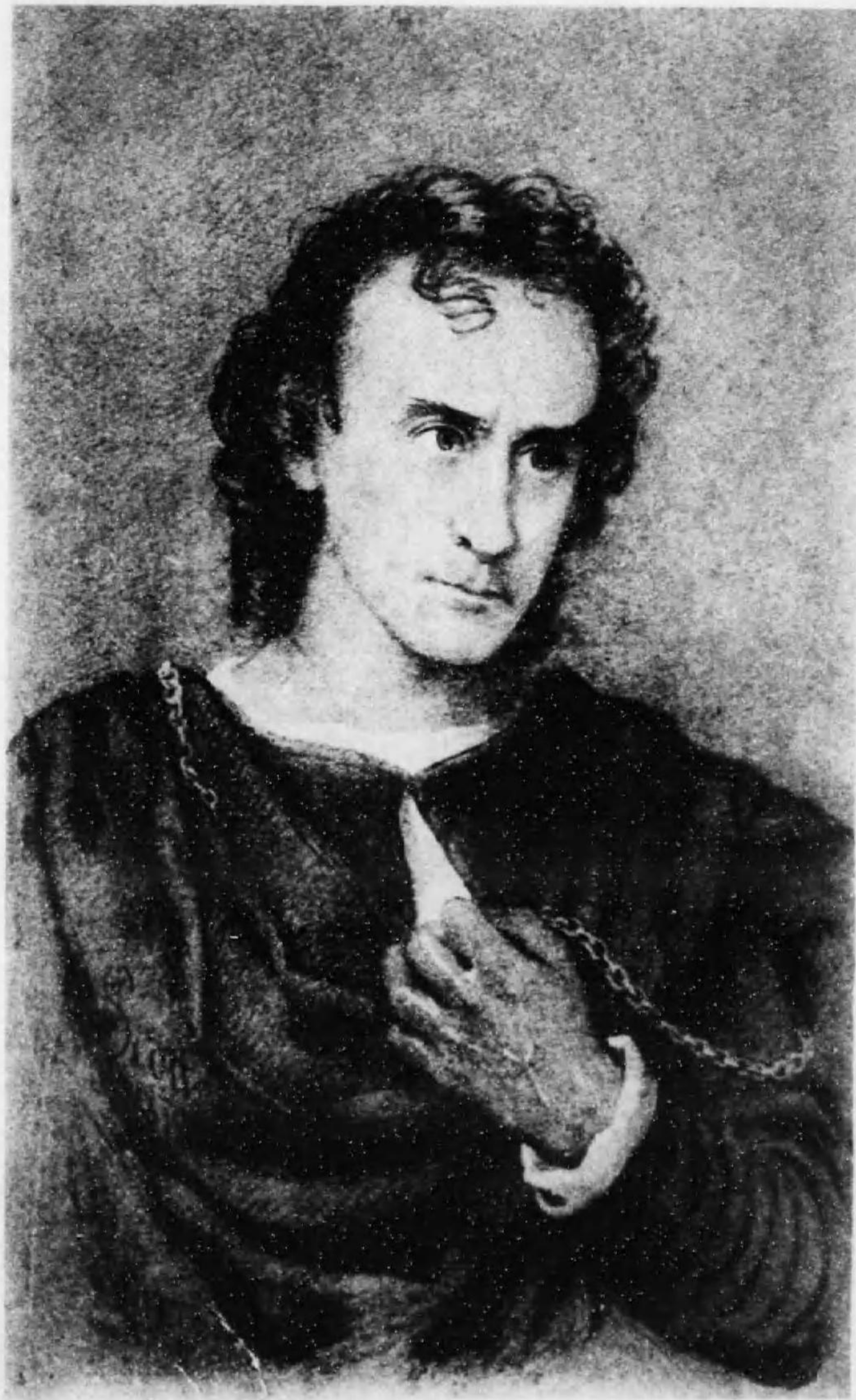
英國使節數名。

デンマーク王妃、ハムレット母、ガアツルード。
 ポローニヤスの女、オフィリヤ。

其他、公卿、官女、吏員、兵士、水夫、使者役、從者等。
 ハムレット父王の亡靈。

場所

デンマーク國の都 エルシノーア。



Edwin Booth.

登場人名



ハムレット

第一幕

第一場

エルシノーア。宮城前の高臺。深夜。

兵卒 フランシスコ。立番してゐる。

こゝへ組頭 パアナード。入来る。

パア 何者ぢや？

フラン あいや、其許こそ。待て、名宣らしめ。

バア 今上萬歳!

フラン バアナードーどのか?

バア 中々。

フラン 刻限通りにようこそお出下されました。

バア 恰ど十二時を打つた所ぢや。退つて休ましめ。

フラン かたじけなうござる。嚴う寒うござる、心が切なうてなりませぬ。

バア 何も別條はおじやらなんだか?

フラン 鼠一疋出ませぬ。

バア む、休ましめ。自然我等が夜詰の同役、マーセラスとホレーシオとにお

逢やつたら、急ぎ参られいと言うておくりやれ。

フラン けぶらひがしますやうな。……こりや、待て! 何者ぢや?

若き學者ホレーシオと組頭マーセラス入來る。

ホレ 此國の良友

マー まつた王家の忠僕。

フラン 安らかに過させませう。

マー お、其許にも。何人が代られたな?

フラン バアナードーどのでござる。安らかに過さしませ。

と入る。

マー なうく! バアナードーどの!

バア さいふ御手前は……や、ホレーシオどのか?

ハレ まづは其様なもので。

バア ようこそホレーシオどの。ようこそマーセラスどの。

マー え、彼の物は今宵もまた出ましたかな?

バア 何も見ませなんだ。

マー ホレーシオどのには、何事も我々の氣の迷ひぢやと申されて、我等が再度までも見ました怪異を眞とはせられませぬ。それゆゑ今宵夜と共に張番いたし、怪しい物が出ましたなら、目前實否をたゞいて一問答せらるゝやう御誘引申してござる。

ホレ はて、何の出ることがござらうぞ。

バア まゝ、懸けさしめ。何としても聽入れぬと取堅めてござる其お耳へ、二晩までも見ました始終を改めて語りませう。

ホレ さらば斯う腰を下いて、バアナードどの、お物語を承りませうす。

バア 正しう昨夜の事でござる。北斗星の西に當る、あれ、あの星が、恰ど唯今光りをる邊へ參つたころ、マーセラズと身共とが張番の致いてをると、折しも鳴渡る一時の鐘……

マー しつ、だまらしめ。あれ、あそこへ現れました！

先の王ハムレットの亡靈現れる。

バア お崩れあつた先君をそのまゝのあの姿

マー 其許は學者ぢや程に、言葉を掛けて見さしめ。

バア ホレーシオどの、先君のお姿に其儘でござらうかの？

ホレ いかにも。不思議とも又怖しいとも、身の毛がよだちます。

バア どうやら物を言うてほしさうな。

マー 何か問うて見さしめ、ホレーシオどの。

ホレ 汝本來何者なれば、故のデンマーク大君の武しく莊嚴しい御軍装を借り奉つて、此様な深夜には横行のするぞ？ 敢て汝に命ずるわい、語れ。氣に逆うた。

バア あれ、だんく〜と立退きまする！

ホレ 待て！ 語れ、語れ！ 敢て汝に命ずるわい、語れ

亡霊消える。

マ 消えた。返答は好まぬげにござる。

バア ホレーシオどの、何とぢや？ 顫うて蒼ざめてゐめさる。何と、氣の迷ひとばかりも申されまい。どうでござるの？

ホレ 神以て、此肉眼の正しい證據がござらなんだら、能う信じますまいわい。

マ 先君に似申してをりませうかの？

ホレ 其許が其許に似てゐめさるやうに。あの甲冑こそは傲慢なノールウェー

とお手合せの折の物具。あの憤怒の面持も言葉戦は無益とてポーランド

の氷原にて、櫓に乗れる敵兵を懲らされた折の眼光。ても不思議な！

此通り再度まで、時刻とても同じ深夜に、我々が見張の間近を、出陣の歩調

で過りました。

仔細には考慮も及びませぬが、唯大旨を申さうに、こりやこれ何事か當國

に珍變の起る前表。

マ 是て先づお下にござれ、承知りたい儀がござる。近頃何とも心得がたい

は、國內を擧り斯く嚴重に夜の目をも合せぬ警戒、毎日の大砲鑄造、まつた

外國より夥しい武器の買入、剩さへ船大工を驅集めて休日も與れぬ苛酷い

賦役。如何な大事がさしかつて、此様な晝夜兼行、火急の準備には及び

申すか？ 御案内の御仁はお聞せ下されう。

ホレ その儀は我等がお話申さう。とにかく噂は斯様でござる。現に今がた

も見えさせられた先君の御在世中、かたかくも知らるゝ通り、前のノール

ウェー王フオオチンプラスが不遜の高言を怒らせられ、一騎打のお手合せ

あつたる所名に負ふ勇猛の先君とて、フオオチンプラスは其場に落命。

豫て武門の掟に照らいて取結ばれたる契約によれば、フオオチンプラスは

一命もろとも其邦土を失ふべき筈。もつとも之に對して相當の所領を賭

けられたれば、此方御不利ともなるときは、それが敵の手に落つべかりしを、同じ契約の明文によつて敵方の御手に入つた。然る所一子同苗フオオチンプラス、血氣無謀の若者、此度ノールウエーの邊境にて、事を好み餌に群る命知らずの暴徒をこゝかしこより驅催すは、一定暴威を以て父が舊領を取戻さん結構と廟議一決、さてこそは此手配、徹夜の警戒も國內上を下への騒動も、畢竟はこれが爲とぞんずる。

バア

何さま、それに相違ござるまい。さすればあの物の怪が、此軍には因縁深き先君さながらの甲冑姿で、夜通しに現るゝも有理でござる。

ホレ

心の眼を痛むるは微塵。むかし羅馬全盛のころ、大シーザー落命の少しき前かた、墳墓悉く主を失ひ、墓衣を被たる亡者ども羅馬の街頭にをめき叫び、白日に光なく、星は火焰の尾を曳き、血の露降り、大海原を自在に扱ふ大陰も、世の果かとはばかり、全く光を失うたとやら。それによつて似た異

變の前表、凶事の前驅、不祥の兆を當國人に見する天地の變象。……や、しづかに。あれ、またあしこへ。

亡靈再び現れる。

どりや吾等が遮つて見う、祟を受けうとまよ。……待て、怪しきもの！ 汝聲あらば、能う物を言ふならば、手に語れ。……予には功德ともなり、汝には心安めともなる事のあらば、手に語れ。……知らば避けらるゝ國家の不祥を知りてあらば、おゝ、語れ！……或は噂の如く、生前地中に埋めおいたる不淨財に執念残つて、能い浮ばずに彷徨ふか？ ならば語れ。待て、語れ！……

鶏鳴く。

お止めなされ、マーセラス。
此鉾で打ちませうか？

マー

ホレ とゞまらずはお打ちなされ。

バア こゝちや！

ホレ こゝちや！

マー 消えてしまつた！

亡霊消える。

あのやうな氣高い物をば手荒う扱つたは悪うござつた。空氣も同様に何の手ごたへもござらぬのに、毆打擲は効ない調戲ぢや。

バア 物を言ひさうでござつた處に鶏めが啼いたので……

ホレ 怖しい招喚を科人などが受けたやうに、怖れ戦いたる其風情。傳へ聞く、

且を知らす鶏が朗かな喉を開いて大日輪を呼覺せば、海中火中空中乃至土の中を彷徨ふ精靈も懼れ隠ると、證據を見しは今が始めて。

マー げに鶏の聲で消え失せました。救世主の御降誕をお祝ひ申す季節となれ

ば、お威徳のあらたかさに、曉告鳥は夜すがら唄ひ、亡者も畏れて出歩かず、眞夜中も無事息災、星や變化も能う祟らず、魔を使ふ婆も其通力を失ふとやら。

ホレ 我等もさやう聞及うで半は眞とも信じます。したが、あれ御覽ぜ、朝日

が紅の衣を被り、あなたに高き東方の岡邊の露を踏昇る。夜の見張もはや是まで。何と昨夜の顛末をばハムレット様に聞え上げうではござるま

いかり。吾等に答へぬ亡霊も王子には口を開きませう。御同意ならばさやう致さう。さるは王子を思ふ吾等の眞情まつた忠勤でもござりまする。

マー それこそは望む所でござる。幸ひ今朝彼の君のお口にかゝる便宜の場所を身共心得をりまする。

第二場 同じくエルシノーア王城。城内の大廣間。

喇叭の聲の中に國王クロアティヤス先に、妃ガアツルード、ついで王子ハムレット、侍従長ボローニヤス、其男レーヤアチーズ、朝臣デルナマンド、コオネリヤス、其他の公卿、侍者多勢入來る。

王

親兄故ハムレット王崩御の記憶今も尙鮮かなれば、おのゝ深き悲歎に沈み、全國舉つて一つ眉根に顰まんが相應しき振舞なれども、哀んで傷らんは愚かなれば、吾等分別の以て至情と闘ひ、深く故王を哀みながらも國主たる身の本分をも忘れず。すなはち堪へがたき悲歎を忍うで、悲喜哀歎を等分に、一眼には涙を垂れ、一眼には笑を含み、祝うて故王の葬儀を了へ泣いて新婚の式を行ひ、前の嫂たるガアツルードを此度改めて妃となし、此デンマークの主權を分てり。まつた豫め此儀については廣く聰明の御

改

身等に詢り、十二分の談合を経たりし條、深く満足に思ふぞよ。……さて改めて申すべきは、面々もぞんじの如く、若輩者のフォオチンプラス、予をば庸主と侮つてか、但しは親兄の崩御によつて國內亂れたりと臆測つてか、夢の如き便宜を恃うで煩しう使者を送り、先年其父フォオチンプラスが契約の明文によつて我勇敢なる兄君に献げ奉りし舊領地を取戻さんす結構。彼れが事はこれまで。……さて今日一同をかく集へつる仔細は、右フォオチンプラスが叔父ノールウェー王こと、近年老病にて臥床を離るゝこと叶はざれば、かゝる陰謀あるを知らず、されども此度の徵募に従ひまつた賦役に應ずる輩は何れも彼れが配下の者ゆゑ、之を制へ止めんことは彼れが力に能はん筈。すなはち其旨を認めおいたり。……コオネリヤス、ブルチマンドの兩卿には、此挨拶の使者となつて、老ノールウェーが許に下向あるべし。たゞし御身たちに委ぬる所は、かまへて此書中に認めたる細目の

外に出づべからず。さらばぢや、すみやかに命の果いて忠勤の程を見せられい。

如何なる儀の嚴命にもあれ、忠勤の盡し奉りまする。

さもあらう。恙なうお往きやれ。

ブルチマンド、コオネリヤス 入る。

さてレーヤアチーズよ、御身の申條は如何なる儀ぢや？ 願事とおしやつ

たが、それは何ぢや？ 道理に合うた請願ならばデンマーク王が聴かいで

ならうか？ レーヤアチーズよ、御身が請ふことならば、請はれてやがて遣す

のではなうて此方から望んでも遣すのぢや。御身が父御とデンマーク王

座との交情は心と頭、手と口とよりも懇親ぢやわい。レーヤアチーズよ、

おぬしの望とは何ぢや？

惶れながらフランス國へ再遊の儀を何卒御裁可下されませう。 御即位を

レー

賀し奉らうため、喜び立歸つてはござりますれど、大典滞りなく相濟み公務も果ましたる上は、改めてフランス國へ立戻りたき微臣が衷情、何卒御仁察下しおかれませう。

して父御には異存無いか？ ポローニヤス、御身の意は？

惶れながら、伴めが切なる請願、押問答の末に餘儀なう彼れが願文へ承引

の仕りました。何卒お聽届遣されませう願上げまする。

レーヤアチーズ、此上は便宜次第に發足お爲やれ。 時はお主のまゝぢや、

めでたう日を送りませい。……さて、ハムレットよ、甥と呼うだは前の日、今

は我子……

ハム (傍を向いて) 親族以上なれど、肉親とは思はれぬわ。

王 はて、心地でもあしうてか、常住曇りがちな其面色？

ハム いや、曇つてはをりませぬ、いつそ日あたりが好う過ぎます。

妃 いやなうハムレット、その愁はしげな色をふりすて、なづかしう君に事へ
 さしませ。いつまでも伏目がちに冥府なる君を慕はんも効なし。生あ
 れば死あり、人は此生を経て永劫の未來に赴く。これが浮世の常ぢやわ
 いの。

ハム

母上、げに常でござります。

妃

すれば何として其方の目には常ならぬこと、見ゆるぞ？

ハム

見ゆるとや、母上？ いや、さうあるのぢや。見ゆるとやらは知ること
 ござらぬ。まこと小子が心中の有りのまゝを表すは此墨汁色の外套でな
 く、此定例の喪服でなく、わざとらしう吐く溜息で無く、川と溢るゝ涙でも、
 萎れ顔のへし口でも、いや、ありとある愁歎の式、作法、外容でもござりま
 せぬ。げに是等こそは見ゆるもの、誰れにも擬事の出来るわざぢやが、そ
 れがしが心中には眼に見えがたいものゝござる。其等は只愁傷の飾や衣

王

服に過ぎませぬ。

ハムレットよ、さやうに亡き父御をお歎きあるは孝子の殊勝な情操と感じ
 入ることなれども、またよう辨へたまへや、父御も嘗て其父御を失ひ、其失
 ひし父御とてもまた其父御を失はれたり。後れたる子が喪に籠つて暫く
 哀悼の禮を盡すは、げに然るべき情義なれども、さりとして頑ななる哀傷は、
 第一神明に不敬の憚り、次に男らしからぬ愁歎、すなはち天に對しては非
 禮、心に信仰の守護無き證、短慮無智愚昧のふるまひ。何故とお言れ、か
 くあるは必然にして世の常事と悟りながら、何とていつまでも思ひ入り、
 氣むづかしく歎き哀まらんや？ あさましう！ かくの如きは神に背き、死
 者に背き、自然に背き、最も道理に悖れるわざぢや。父親の先だつは古今
 の定理、世に最初の死屍あつてよりこのかた、道理は常にかくあるをば「必
 然の理」と呼ばうたわい。こりやハムレットよ、詮無き哀傷を地に抛つて

予をば實の父とも思やれ。すなはち國民に、御身は即て王位を繼ぐべく、まつた予が恩愛は慈父に異ならずと知しめ給へ。さて彼のウイッテンバアの大學へ再び赴かんの思立は、予の最も好まぬ所、願はくば、近親とも、重臣とも、我愛子ともなつて、我等が面前に留りめされ。

妃

ハムレットよ、母の祈をば徒らになお爲やつそ。なう、こゝにゐや。ウイッテンバアグへは往かしますな。

ハム

力めて御心に従ひませう。

王

はて、それこそは殊勝な返答。此上はデンマークに留り、吾等と同様に世を送りやれ。……妃よ、おじやれ。ハムレットの柔順なる承諾にて、心の花も笑む心地ぢや。其めでたさを祝はんため、只今より酒宴の開き、同時に賀砲を雲に放たば、天また王家の賀宴を祝うて地上の霹靂に響應せん。……いざ彼方へ。

ハム

喇叭の聲の中に皆々入る。ハムレット一人残る。

おゝ、此硬き剛き肉が、何とて溶け融解けて露ともならぬぞ！せめて自殺を大罪とする神の掟がなくばなあ！おゝ！おゝ！現世一切の業務が悉く厭はしうも、あさましようも、無益しうも思はるゝわい！ちえゝ、あさましいわい！實を結ぶ毒草を抜きもやらぬ荒庭ぢや、臭い穢いものばかりが一面にはびこりをる。これほどにならうとは！お死にやつて只二月！……いやまだ二月にもならぬ程ぢやに。あのやうな比類稀なる國君！それと此とを比ぶれば日の神と羊の怪物、母上の面をば荒い風にもあてまいと愛しがりめされた父上。ちえゝ、情なや！思ひ出さねばならぬか？睦じうなさるゝにつれて、彌いとしさの募るかとはばかり、離れがたなうも見えさせられた母御が……まだ一月も経たぬうちに……いやゝもう思ふまいぞ。……あゝ、脆きものよ、女とは汝が字

ちや！……たつた一月！……ニオベのやうに涙にそぼつて柩をば送らせられた其履もまだ古びぬに。……母上が、母上すらも……おゝ！……分別無き獸とても今暫は歎いつらうに……叔父ぢや人と御再婚、我父の弟ながら、此ハムレットがハアキュリーズに似たる程にも似ぬ弟と。一月も経たぬ間に？ 空涙に摺りあかめた臉の色さへもあせぬうちに。おゝ、無慚非道！ 邪淫の床へかうまで待兼ねたやうに急ぐとは！ 是れ一定善い事でおりにない、大凶事のもとゐたらうぞ。……や、誰れか來をつた、むゝ、此胸が裂けうとまゝ！

ホレーシオ、マーセラス、バアナードー入來る。

ホレ

御前の御安泰を祝しまする。

ハム

おゝ、堅固でめでたいなう。や、ホレーシオ……但しは予の僻目か？

ホレ

御意の通り、臣ホレーシオでござりまする。

ハム

こりや、兄よ、その呼名は取換へうぞ。して何としてウイテンバアグから此處へは？……おゝ、マーセラスか？

マー

御前さまには……

ハム

ようおじやつたの。……(バアナードーに對ひ)おゝ、ようこそ。……(ホレーシオに)實正どうした仔細あつてウイテンバアグから遙々こゝへは？

ホレ

のらくら根性からでござりまする。

ハム

いや、其様な悪口は御身の敵からでも聞きたうない。まして自身で悪ういうてそれを予に信ぜさせうとは以ての外ぢや。なんで御身が懶惰漢であらうぞ。したが此エルシノーアへお出でやつた用事は何ぢや？ ようせ

ホレ

實は御父君の御葬儀を拜まうとて参りました。

ハム

はて弄るまい。おそろく母上の御婚儀を觀うためであらう。

ホレ げにおつしやれば、間も無う御慶事。

ハム なそれ、儉約！儉約！ 葬式に用うた炙肉をば即て婚禮の膳部へも廻す冷

いもてなしぢや。あのつれな目を見う程なら怨重なる讐敵と天で逢うた

はうがましぢやわい！ 父上が……父上の顔が見ゆるやうぢや。

ホレ え、何處にでござりまする？

ハム はて、予が心の眼に。

ホレ それがしも嘗てお目通りを致しましたが、眞に氣高いお容姿。

ハム 何處から如何やうに查べうとまゝ、又とあるまじい人であつたわ。

ホレ 御前、正しう昨夜お目にかゝつたかと存じまする。

ハム お目にかゝつたとは、そりや誰れに？

ホレ 御父君に。

ハム 父君に！

ホレ まづ、御驚愕を鎮めさせられ、暫くお聴下されませうす、只今聞上げま

する近頃不思議の一條、その證據人は此れなる人々。

ハム さゝ、その仔細早う聴かうぞ。

ホレ 二夜までも引續き此なる兩士、マーセラス、バアナードーが夜詰の折節、草

木も眠る眞夜中に、世にも不思議の姿を見たり。其姿といつば、頭より足

の爪先まで、甲冑隙間もなく取りよろひ、御父君をさながらの容態にて現

れ出で、おごそかなる出陣の歩調にて、怖れ戦ける兩士の面前僅か二三尺

を隔て、徐々と通行なす。兩士は餘りの怖しさに、膽魂も溶解る心地、口

を緘み立つたるまゝ、物言ひかけも能せなんだと、さも怖しげに内々の物

語。それがし乃ち兩士と共に第三夜の夜詰を仕りしところ、聞きしに違

はず、時刻も姿も、片言の相違無く、現れいづる怪しき幻影。先君を存じ

をりまするが、其お姿に似たとはおろか、此兩つの手の似たる程にも。

ハム

して其場所は？

マ

我々どもが見張を致しをりました
る高臺にござりまする。

ハム

物言ひかけてはお見やらなんだ
か？

ホレ

言ひかけては見ましたなれども、返
答は仕らず、尤も一たびは頭を擡げ
て何か言ひたげにも相見えまして
が、折から啼き出す鶏の聲に戦き縮
んで消え失せました。

ハム

ても不思議な。

ホレ

憚りながら、此儀神以て相違ござり



ハム

ませぬゆゑ、有りのまゝに言上いたすを臣下の本分と存じまして。
いかにもく、とはいへ何とも心がり。今宵もお身たちは夜詰をする

バマ

御意にござりまする。

ハム

甲冑を着けてゐたと申すか？

バマ

さやうにござりまする。

ハム

頭より爪先までも？

バマ

御意の通り頭より爪先までも。

ハム

すれば顔は見えなんだな？

ホレ

いや、見えましてござる、顔當が引上げてござりました。

ハム

え、不興げに見えたか？

ホレ

御不興と申さうよりも寧ろ悒鬱のお面持。

ハム 蒼白う見えたか、但しは赤かつたか？

ホレ いや、さつう蒼ざめて。

ハム 御身をば見詰めてゐたとお言るか？

ホレ まじろぎもなされず。

ハム 予も其場に居合せたかつたわい！

ホレ すれば、嘸愕かせられましたつらう。

ハム さもあらう。長う留つてゐたか？

ホレ されば相應に急ぎまして百を算へまする程の間。

バマア いや、まぢつと長う。

ホレ それがしが見た折にはそれ程でござつた。

ハム 鬚は灰色であつたか？……どうぢや？

ホレ 御存生中にお見受申しました通り、黒い中に銀色が混つてをりました。

ハム 予も今宵は見張をせう。或はまた現れ出でうす。

ホレ 一定現るゝでござりませう。

ハム 父上の御姿を装ふからは、たとひ地獄が脚下に開いて物言ふなと禁むると

も、予誓つて言葉をかけうぞ。いやなう、おのゝくに依頼がある、今日ま

で此儀をば秘し隠しくれたならば、此上とも口をつぐみ、今宵如何様の

事起るも、只胸の中に合點なし、ていと口外致すまいぞ。御身等の誠意に

早晚報ゆる時もあらう。さらばぢや、十一時と十二時の間にて見張場で

また逢はうぞ。

三人 謹んでお勤をば盡しまする。

ハム はて、お互ひに誠意をば。さらばぢや。

ハム レット残り皆々入る。

父上の亡魂が甲冑にて！ 不祥の前表。さては隠れたる悪行あるよな。

え、夜の來るのが待遠しいわい！……それまでは肅としてゐいよ、我心よ。……悪事はやがて露はれうぞ、たとひ大地を以て人目を遮るとも。
ハムレット入る。

第三場 ポローニヤス邸の一室

レーヤアチズと其妹オフィヤと入來る。

レー

必要の品々も積込んだれば、さらばぢや。いもうとよ、出船順風の便宜のあるたび、居眠つてゐいで消息を爲やれよ。

オフ

すまいとばし思うてかや？

レー

ハムレットさまの、あの空めいたおいとしがりはな、結句一時の浮氣心、若い氣分のざれ事、いは、春育ちの堇の花ぢや、早咲なれば萎るゝも早く、美

オフ
レー

しうはあれど當座の詠ぢや、香も慰みも徒の束の間、只それほど、思ふがよいぞよ。

すれば只それほどの？

只それほど、思つておゐやれ。總別人の

育つは筋や嵩ばかりでない、五體の太うな

るにつれて、心や魂の、内なる作用も大

きうなる。今こそは彼の君、そなたを可

憐らしうおもうて、假にも欺からうななど

いふ汚い御心もおじやらずまいなれど、安

心のならぬ仔細は、下賤とは事かはり、御

自身の意さへも我物にして我物ならず、萬

事お氣儘にもなされにくい大切な御身



分柄ぢや。君たる人の取舍一つに國中の安危に係るからには、下々一同の意見望を詢はしめた上で、お妃定めなどもあるべき筈。なりや可愛いと仰あるとも、其格段な御身分で能はん程の御約束ぢや、所詮はデンマーク國中が應と言はねばいつ何時反故となるとも知れぬと思つて、眞にうけぬが利根な分別。軽々しう彼の君の甘い言葉に耳傾け、情の限を打込み、放埒な仰のまに〜二つなき操の寶を穢さは、取返しのならぬ一期の身の辱。いもうとよ、恐れても又恐れませうぞ。とかく情の後陣に退つて邪淫の矢鋒を避くるが肝腎。謹慎深い處女は月に素顔を見するをさへ不檢束と思ふとやら。淑徳の權化でさへ能う免れぬは世の譏謗。春の幼い花の蕾はまだ咲かぬうちに螟蛉に食はれ、人もうら若い水の出花の春先には、とかく根を枯らす毒氣に觸るゝ。かんまへて油断すまいぞ。用心は萬全の策。若い時分は我れから誤つ、誰れ一人誘はずとも。

オフ

そのお教訓は、妾の心の護衛にして、必ず忘るゝことでは無い。したが兄上、ともすると我が訓を人は自身では能う守らぬ。不品行な牧師は、他人には天へ往けというて險阻な荆棘路を教へておき、自身は放埒な人のやうに、あだ美しい花の咲く自墮落な道を通るとやら。そのつれなことをさしますなや。

お、子が事は氣づかひ無用。つい時刻を過したわい。や、父御がわせられた。

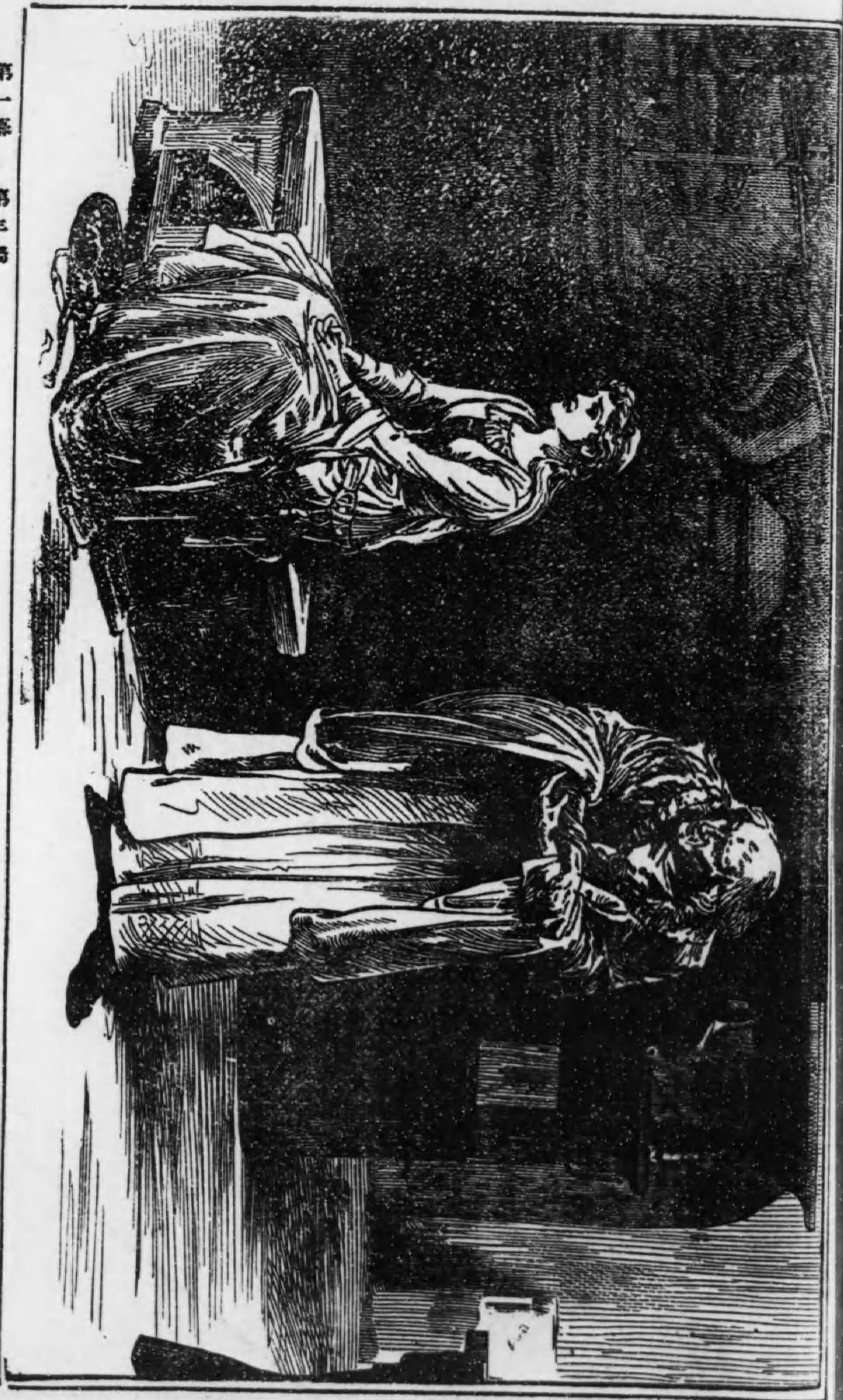
ホローニヤス 入來る。

又のお祈禱は又のお恩恵。はからぬ幸運にて再度のお暇乞を仕りまする。

ポロ

まだこゝにか、レーヤアチーズ？ さゝ船へ〜どうしたものぢや！ 帆は既に風を孕んで、一同が待ちかねをるわい。さ、おぬしの冥福！ まつ

た聊か申聞かせおくべき條々。彫りつけておきめされ。……考慮をうか
と舌に出すな、機に合はぬ考慮は行ふな。友とは親め、さりながらかんま
へて狎れるな。試験済の友達は逆さぬやう鐵箍をはめておけ。但しま
だ翼も生え揃はぬ巢立たぬ知合と握手して手の掌の皮を厚うするな。喧
嘩口論には關係ふな、されど關係うた上は骨のあることを敵手に知らせい。
誰が言葉にも耳は貸せ、口は誰が爲にも開くな。誰が意見も聞くは可し
我意見は言はぬが可し。財囊が許すならば身の廻りには金目を吝むな、
但し異様な好みはすな。立派は可し、華美はわるし。衣裳は數々人を表
す、別けてフランスの上流は此道の大通生粹。借手にもなるな、貸手にも
なるな。借金は儉約の刃鋒を鈍くし、貸金は動もすれば其元金を失ひま
た其友をも失ふ。最後に最も大切なる訓……己れに對して忠實なれ、さ
すれば夜の晝に繼ぐが如く、他人に對しても忠實ならん。さらばぢや。



我祈禱の功德を以て長う其方の心に銘せん。
謹んでお暇乞を申し上げます。

レー

さう、時刻が迫つて僕共が待ちかねをるわさ。

レー

いもうと、さらば。今言うたことを忘れまいぞよ。

オフ

あい、此胸に錠おろいて、鍵はお前の手にあづけておきまする。

レー

おさらば。

レーヤアチーズ入る。

ボロ

むすめ、兄がそなたに言うた事とは何ぢや？

オフ

あの、ハムレットさまの事でござります。

ボロ

はて、それは好う氣が着いたわ。聞けば此中から王子がたびくお内密にて、そなたの許へ入らせられるげな、すると其方が何の斟酌もなう甚う御入魂にしやるげな……用心せいと言うて予に告げた者があるが……若し

定ならば、きつと言うておかねばならぬ、其方は予の女でもあり、まつたまだ嫁入せぬ身といふことをば好う合點してゐやらぬのぢやぞよ。彼の君との情交は何とぢや？ 有體に予にお言れ。

オフ

此中王子様が、幾度もく、お優しい約束をおつしやつて下されました。

ボロ

おやさしい！ わつけない！ 此道の怖いことをば夢さら知らぬげの

其處女らしい言草わい！ 其方は其……約束とやらを實正ぢやと思つて

かいの？

オフ

さあ、どう思うてよいことやら。

ボロ

はつて、教てへやりませう。こりや、其方は嬰兒も同じぢやぞよ、そのやうな約束をば、真正正銘の金貨同様に、やがて支拂うて貰はれうと思ふは。これからは萬事一段と氣がねのしやれ。さうでない……駄洒落の息を切らさぬやうに言へば……予をば阿呆者に爲かねぬわい。

オフ でも王子さまには、そつとも狎褻がましい様子になう、眞實らしうおつしやつて……

ボロ へ、らしうでもあらうかい。 はて、むざとした！

オフ ……偽でない證據にとて、あるたけの誓言をばなされましたわいな。

ボロ はて、それが阿呆鳥を捕へる毘ぢや。 血のくわつと燃える頃には、誓言は

口から出たらめ。 これ、女よ、そのくわつと燃えるものを火と思ふは誤り、

光る程に熱は無く、剩さへ約束する最中にも消えるものぢや。 向後は處

女だてらに軽々しい男まじらひは遠慮しやれ。 よし逢はうとあつても、

切に頼まれねば逢はぬ程の見識が大切ぢや。 さてハムレットさまの御意

はぢや、何がさてまだお年は若し、婦女とはちがうて、萬事伸縮が御自由な

御身分ぢやと思や。 所詮は御誓言を眞に受けやるなやぢや。 誓言とい

ふものは、人を欺さう爲ばかりに奇特らしう經文までも口ずさむ女術を宛

オフ 然の、不貞節を勸める仲人、肚と衣とは雲泥ぢやわい。 畢竟するに、有體に

言へばぢや、向後は暫時たりともハムレットさまと言葉を交し乃至お物語

仕ること罷りならぬ。 ていと申附けたぞよ。 さう、おじやれ〜。

オフ あい、畏りましたわいな。

二人とも入る。

第四場 高臺

ハムレットを先にホレーシオとマーセラスと従いて入来る。

ハム 身を斫るやうな風ぢや。 いかう寒いの。

ホレ よるで摘み切らるゝやうでござります。

ハム もう何時ぢやの？

ホレ まだ十二時にはなりません。

マ一 いや、もう打ちました。

ホレ え、打ちましたか？ 聞きおとしましたわえ。 すれば程もなく彼の亡霊の現れ出づる刻限でござる。

奥にて喇叭の聲、大砲の音。

ありや何事でござりまするな？

ハム 今宵は王が徹夜の御宴なれば、互ひに賀盃を取換いて、足元もしどろに踊り狂ふ亂騒ぎ。 王がライン酒の盃を舉げらるれば、其都度喇叭を吹き銅太鼓を鳴らいて、酒戦の譽を稱ふるのぢや。

ホレ 御慣例でござりまするか？

ハム おゝさ慣例ぢや、が……此様な慣例は、予は此國に生れ、見馴れ聞馴れて生

ひたつたれども、守らうよりも破つたが、遙かに面目ぢやと思ふわい。 東西遠近の外國人に、豚よ泥酔漢よと嘲り罵らるゝは、かゝる亂酒の慣習あるゆゑ。 我國人の所業は、假令上無き手柄とても、之れがために名譽の髓を失ふ。 かやうな事は一人の身の上にも間々あることぢや。 例へば或生得の疵があれば、すなはち素性が賤しいなんど……こりや本來其者の罪では無い、出生は天然ぢやによつて……然るに其天然に得たる疵が追々に増長なし、道理の範圍を越ゆるに至れば……又は或癖が度を過いて世人の所謂行儀作法に叶はぬときは、他に如何な美德あるも、宿命が與へた此徽章、造化が與へた此制服を脱がぬ間……如何に此上なう純潔でも……此一點の疵の爲に腐蝕せられ、世の嘲侮を招くに至る。 只分厘の苦味のために、抜群なる美味の一切をも食ふに堪へずとなすならはし……

ホレ や、御前、あれ〜あしこへ！

亡霊現れる。

ハム

南無天使、諸天善神、護らせたまへ！……神霊にもあれ、悪鬼にもあれ、天の願氣を持ち來るとも、地獄の妖氣を携へ來るとも、底意は善にもあれ、悪にもあれ、かゝるいぶかしき姿にて來る上は問答せん。予は汝をハムレットと、王と、父と呼び參らせうぞ。おゝ、デンマークの大君よ、お答へあれ！ 予をして疑惑に心を破らしめたまふな。神聖き御法の式を盡して正しう葬られたまうた御軀が、何とて蠟引の墓衣を破り、静閑に御遺骨を埋めまゐらせたる陵が、何とて盤石の頸を開いて、又も御骸を吐出だいたるぞ？ 何とて甲冑まで隙なく着させて、さらでも凄き月の夜半に、斯くあくがれいでたまひつるぞや？ 人智の及ばぬ不思議を現じ、造化の侏儒たる人間をば怖れをのゝかせう御底意か？ 語らせられい。何故でおじやる？ 何故ぢや？ 命つけらるゝ事はしあるか？

亡霊 ハムレットを手招きする。

ホレ

何さま他聞をば憚るげに、あれく、御前をば招きますする。

マ

あれくうやくくしう手を靡かせ、別所へと御前を招きますする。なれどもおこしなされますな。

ホレ

必ずおこしなされますな。

ハム

こゝにては物言はぬな。すればそちへ行かうぞ。

ホレ

あゝもし、かまへて……

ハム

はて、何恐るゝことがあらうぞ？ 針程にも惜まぬ命ぢや。まつた魂は

ホレ

彼れ同様に不滅なれば、何の害をも受けう筈なし。またもや予を招きを

ホレ

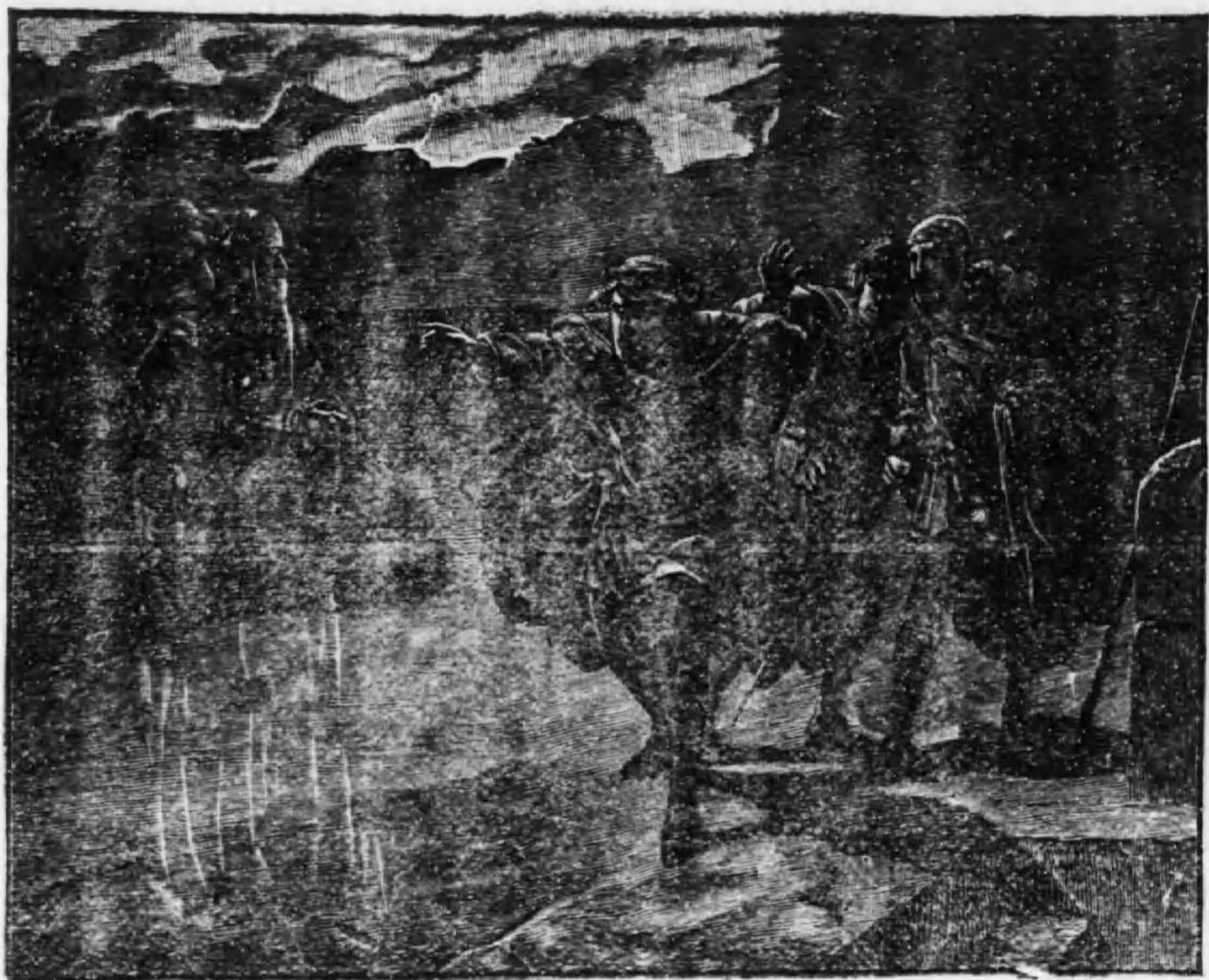
る。さうぢや。

ホレ

これはいかなこと！ 海河なんどへ誘きよせ、まつた海中へ突出たる物凄

ホレ

き絶壁の上に立たせ、そこにて恐しき姿を現じ、御正氣を奪ひ亂心せしめ



奉る手もあること。さらでも千仞の海を瞰下し、轟く怒濤を聞くときは、不思議に心の亂るゝためし。

ハム まだ招きををる。おゆきやれ、ついて往かうぞ。

マ一 かまへておこしなされますな。

ハム え、放せ！

ホレ いや、おとまりなされませい。

ハム 我宿命の促す所ぢや。五體

にありとあらゆる動脈鐵の如くに張り満ち、ニミヤの獅子の筋をも凌ぐわ。まだく予を招きををるわい。……放しめされ。……

と劍を抜く。二人手を離して退る。

妨害なさは手打にいたすぞ！ え、退れといふに！……おゆきやれ。従いて行かうぞ。

亡靈についてハムレット入る。

ホレ お心が惱亂して我歎の辨へもあらせられぬ。

マ一 御後を尾ひませう。命に従ふべき場合でござらぬ。

ホレ いざさらば。……此行末は何となるやら。

マ一 こりや何かデンマークに非道事がおちやりまするぞよ。

ホレ 善悪ともに天の導き。

マ一 あいや、先づお後を尾ひませう。

二人入る。

第五場 高臺の他の一部

亡霊先にハムレットついて入来る。

ハム いづこへ予をつれゆかうとや。 答へい。 われはもはや行くまじいぞ。

亡 わがいふことをよく聞けよ。

ハム はゝあ。

亡 阿鼻焦熱の苛責の焰に、此身を委ぬる時刻は迫れり。

ハム おゝ、いたましやなあ！

亡 かひなき憐みを寄せずもあれ、心を定めてわが語る一大事をよつく聞け。

ハム はゝあ。 語らせられませい。

亡 聞いたる上は必ずともに、復讐をば忘るまいぞよ。

ハム や、何と？

亡 われこそは汝が父の亡霊なれ。 只真夜中の若干時のみ、閻浮にさまよふ

許あれども、娑婆にて犯し、罪業の焼き浄めらるゝそれまでは、焦熱地獄

に餓鬼の苦み。 もしあの世の祕事を語るを禁ぜられずもあらば、只一言

をだに洩さんに魂は慄へ戦き、若き血汐は氷とこいり、二つの眼は星の如

くに、其圓座より躍りいで、縮れたる其頭髮も、怒る針鼠の蓑毛のやうに、

一筋毎に逆立つべきぞよ。 さもあれ冥府の一大事は、人間の耳に傳へがた

し。 聞けよ、おゝ聞けよ！ まこと亡き父を愛する心の切ならば、

.....

ハム おゝ！ おゝ！

亡

非義非道の弑逆の怨を晴らせハムレット。

ハム

なに、弑逆とな!

亡

おほよそ弑逆に非道ならぬはなしとはいへども、これこそまことに例しも知らぬ、非義非道の弑逆ぞや。

ハム

いざとく其仔細をお語りあれ。刹那に千里を走るといふ戀の思ひの翼よりも、黙想の羽がひよりも、尙とく翱翔りて復讐なさん。

亡

さもさうず、さもありなん。かくても感動せざりせば、物忘れ川に生ひ朽つるてふ益なき艸の鈍きに劣らん。いでさらば、よつくお聞きやれ。予園内に眠れる間に、毒蛇來つて螫し殺しぬと、實しやかに言ひ拵へ、うまうま國中を欺いたれども、まこと此父を螫しつる毒蛇は、今其頭に、黄金の冠を戴きをるぞよ。

ハム

すりや、わが心の知らせにたがはず! あの……叔父御か!

亡

いかにも、亂倫とも邪淫とも、言はうやうなき人畜生……天成人を惑亂す不思議の奸智に長けたれば……貞操無二とも見えたりしわが妃をば説き惑はし、竟に耻づべき邪淫の遂げたり! おう、ハムレットよ、是れ何といふ悖戻ぞや! 大婚の式場にて、契りつる言葉をつゆ違へず、深くも愛せし予に背いて、彼奴の如き醜じものに心を移し従ふとは!……さりながら眞の操は、よし神人と化現して邪淫の來り誘ふとも、ゆめく心を動かすまじく、輝く天使につれそふとも淫婦は淨樂の床に倦んでやがてぞ腐肉に思を寄する……や、はや吹きそむる朝けの風。言葉短かに物語らん。日ごろの習ひ、眞晝過に、予園内に眠れる折から、油断を見すまし忍びより、汝の叔父が小瓶より我耳に注ぎ入れし大毒液の効力は靦面水銀のやうに我五體のありとあらゆる血管を走り傳つて血汐に觸るゝや、譬へば乳汁に酢の滴りを注ぐが如く、鮮血忽ち濁りこぼつて、滑かなりし我肌を見る見

る掩ふ瘡ぶたは、癩病やみをさながらの、目もあてられぬ醜さ穢さ。……ま
つこの如く假寝の間に、現在弟の手に罹り、命をも王冠をもまつた妃をも
一時に、奪ひ取られて罪業の、花の盛りにあさましや、聖禮も受けず、懺悔
もせず、最期の油を塗らるゝこともなく、頭に夥しき咎めをいたゞき、神の
御前に引出されし怖ろしさ！

ハム

おゝ、おそろしや〜！

亡

汝孝子の心あらば、ゆめ此怨を忍ぶ勿れ。デンマーク王家の閨房を邪淫
の床とならしむるな。とはいひながら忘れても、母には害を加へまいぞ
よ、天の捌きに打任せて、心の鬼に身を責めさせよ。さらばなりハムレ
ト。闇を照らせる螢火の効なき焰の薄るゝは、はや曉の近づく知らせ。
さらば、さらば、おゝさらば！、わがいひつけをば忘るゝなよ！

ト 亡霊消える。

ハム

おゝ、ありとある天の神々！ 下界にありとあらゆる神！ 地獄にありと
あらゆる悪魔も！ 何を馬鹿な！ おゝ、こたへをれ、わが心。おのれ、
我五體の筋肉、ゆめ俄に老い朽つるなよ、しかと此身をさゝへをれやい。
……なに、命令をわするなと

や！ いふにや及ぶ、あさま
しの亡き靈よ、惑亂したる此
頭に記憶の力の存する間は、
いひつけをば忘るなとや！
念にや及ぶ、我記憶の帳づら
より、をさなき耳目の寫しお



いたる格言、名句、色、形、あらゆる記録を拭ひ去つて、我頭腦の巻中には、
只尊靈の嚴命ばかりを餘事をまじへいで記留めう。おゝさ、天に誓うた

ぞよ！……あさましき非道の女性！……たぐひなき大悪人！ 面に笑を
 たへながら……さうぢや、覺帳に書きとめおくが當然ぢやわい。……面に
 笑をたへながら、笑みつゝも尙かくの如き大悪事を行ふ者の世にありと
 は！ ともかくも此デンマークには現の證據が……どうぢや叔父貴、まつ
 此通り。……いで此上は、大切な命令を。 むゝ……さらば、さらば、おゝ
 さらば。 わがいひつけをば忘るゝなよ！。 もはや天に誓うたぞよ。

此時奥にてホレーシオ、マーセラスの聲にて下の如く呼ぶ。

御前、御前……

ホレ

ハムレットさまい……

ホレ

天よ君を護らせたまへ！

マ

何卒！

ホレ

ほうい〜！ 御前さまいのう。 ほうい〜！

ハム

ほうい〜！ こゝへ來う。 ほうい〜！

ホレーシオ、マーセラス 入來る。

マ

いかゞわたらせられまする？

ホレ

何とでござりましたぞ？

ハム

おゝ、奇怪千萬！

ホレ

御模様をお聞かせ下されませい。

ハム

いや。 言うたらば人にいはう。

ホレ

いや、私は、誓つて口外はいたしませぬ。

マ

私とても、他言は仕りませぬ。

ハム

したらまあ、何と言ふぞ？ 人間の念頭にかつて思ひ及ばうことか？……

二人

他言はすまいな？

二人

神以て他言はいたしませぬ。

ハム 此デンマーク廣しと雖も、内に住める悪漢にして世に怖しい大悪人でない奴はわぬわい。

ホレ はて、それしきの事は、あの世から亡霊が来て告げます程でもござりませぬ。

ハム む、さうぢや。いかにもさうぢや。ぢやによつて、もうく窮屈な事はやめにして、互に手を振合うて別れたがよからう。人はめい／＼に用も務もあるならひぢや。……御身たちは御身たちの務めを……予は予で、歸つて祈禱でもしませうわい。

ホレ これはいかなこと、とりとめもないことを仰せられます。

ハム はて、氣にさはつたら堪忍しやれ。予がわるかつた、はて予がわるかつたによつて。

ホレ めつさうな、何のおわるいことがござりませう。

ハム いゝや、あるぞよ。バトリック上人も照覽あれ、しかもおそろしいわるい事があるぞよ。最前の幻影はな、ありや全く正しい精靈とばかりいうておく。さて何を語らうたか、定めて聞きたからうが、こらへてたもれ。さて改めていふぞよ、御身らは予が信友でもあり、學者でもあり、武人でもあるによつて、予の只一つの頼みをば聴いておくりやれ。

ホレ 何事でござりまする？ 承りませう。

ハム こよひ見たことどもを、かんまへて口外すまいぞ。

二人 畏りましたござりまする。

ハム いやさ、誓言をせい。

ホレ 神以て他言いたしませぬ。

マイ 私とても神以て口外はいたしませぬ。

ハム 予が劔かけて。

マ一 もう誓言は仕りましたしてござりまする。

ハム 眞實これなる劔にかけても。

此時地下にて

亡 誓言！

ハム や、何といふぞ。ういやつの、お主もそこにか？……ささ……お聞きや

つたか、地の下でも誓言せいといひをるわい。……ささ、誓言せい。

ホレ 本文を仰せられませい。

ハム 御身らが見た事をかんまへて他言せぬと、予が劔かけて誓言せい。

亡 (地下にて) 誓言！

ハム む、現處、一切處な！ すれば居どころ改めう。……ささ、ささへく。

……ま一度予が劔に手を戴せて、御身らが見たことをかんまへて他言せぬ

と、此劔かけて誓言せい。

X

亡 誓言！

ハム ほ、う出来た、田鼠どの！ ても速うおわたりやる！ 立派な工兵ぢやわ

い！ さ、ま一度こゝへ、變へたく。

ホレ これはいかなこと！ 奇怪不思議！ 例も知らぬ……

ハム さ、ぢやによつて、只何事も知らぬ振をして聞いておきやれ。此天地の間

にはな、所謂哲學の思も及ばぬ大事があるわい。ささこゝへ。……た、最

前の通り、かんまへて……すれば後世の冥福があらう……たとひ向後、予

がどのやうな様子をせうと……或は殊更に奇怪な舉動をすまいものでも

ないが……其折かんまへて、このやうに腕を組み頭を振り乃至意味ありげ

に「はて、あれには仔細が」とか、「知らぬではなけれども」とか、「いはうとさ

へ思へば」とか、「口外してよくば」とか、おぼつかなげなことをいうて、予が一

身の内密を知つたがやうに見せまいぞよ。……すれば必ず大事の期に、神

が冥助を下されうす。 誓言せい。

七 誓言せい！

ハム はて、さう氣を揉むまい、安心さしめ〜！

二人劍の欄に接吻する。

此上は予も眞情のあるたけを御身らに酬ゆる積りぢや。 ハムレットづれの凡夫が、朋友の信義を能盡す限り、神慮にさへ叶はゞ、必ず違へることではない。 共に城内へゆかうぞ。 な、口元に指をあて〜…頼んだぞよ。(傍を向きて)世の關節が外れたわい！…何たる悪因縁ぢや、予が反正の任を帯んで此様な世に生るゝとは！二人に對ひてあいや、おじやれ、共に行くぞ。

ハムレット先に皆々入る。

* * * * *

第二幕

第一場 ポローニヤス邸の一室

ポローニヤムと家來レーナルドーと入來る。

ポロ 此金と此書面を忤めに渡しておくりやれ。

レー 畏つてござる。

ポロ 忤をば訪ぬる前に、先其行迹を探つてお見やるが上策であらうぞ。

レー 私もさやうに存じをりました。

ポロ ほ〜う出來た、あつばれ！ よいか、先づバリーには、何様な、何といふデ

「ンマーク人がをるか、何として暮し、何處に住む、何様な仲間と交際うて、其費用は何程かと問うてお見やれ。さてかやうに迂曲に問うて、敵手が悴を存じをると分つたらば、一段と話を運うで「それがし彼男の父者をも友達をも存じをりまする、まつた當人をも幾らか」と些許は悴をも存じをるやうに見せかけるぢや。……心得たか？」

ボロ 「はあ、心得ましてござる。」
 レー 「當人をも幾らかは、さりながら善うは存じませぬが」と言うて、「したが其お人が小生申す所の仁でござらば、中々の氣儘者、云々の道樂もござる」など、何なりと心任せに作りすまいて言うたがよい。が、悴の不名譽になるやうなとは努言ふまいぞよ。必ず共に氣をつけやれ。但し若氣の我儘には附物のやうに知れ渡つてをる放逸や亂暴や不埒ならば關心は無い。博奕をなさりまするなぞと？」

ボロ 「中々、又は酒を飲む、劍術をつかふ、喧嘩口論をする、悪所入りをする、そこどころまではよい。」
 レー 「それではお名前にさはりませう。」
 ボロ 「氣も無いこと。そこがおぬしの言ひ廻しぢや。したが今言うた外の誹謗は、例へば荒淫ぢやなぞとは假初にもお言るまいぞ。それは子が本意で無い。結句悴の過失は、猛しい心の溢れで、血氣剛な、嫉の足らぬ頃には有りがちの不埒と見ゆるやうに、味よう言ひ倣いてくれさしめ。」
 レー 「ではござりまするが……」
 ボロ 「何故にそのつれなことを致しまするか？」
 レー 「中々、それが承りたうござりまする。」
 ボロ 「はて、それは斯様ぢや。そもく是は天下晴ての謀計ぢや、斯く、譬へば、製作のしてをる間に、ふと疵が着いた品などのやうに、悴にさばかりの難

を附ければ、おぬしの話敵手が、よいか、自然おぬしが探らうとしておりや
 る其當人が、右噂のあつた不埒どもを曾か犯いてをるのを見たことがあれ
 ば、一定おぬしに調子を合いて、ま此やうにも言はう、「え、其許様は」とい
 ふか、或は「お手前は」乃至「貴殿は」とい
 ふか……これは身分にもより、其國風にもよることぢやが……

御意で。

レ
 ところでその其男がぢや、其男が……え、と、何やら言ひかゝつてをつたのぢや
 ……はて、何とやら言ふ積りであつたが
 ……何といふ所でしまうたか？
 私に調子を合せまして「お手前は」とか、乃至「貴殿は」とか……



ボロ

「おぬしに調子を合いて……それく。おぬしの言ふことに調子を合
 て、先づ此やうにも言はう、え、其御仁ならば存じをります、え、昨日」又
 は「先日……云々の折にお目にかゝりましたが、お連は云々の方々で」又は
 おぬしが言うたやうに、或は「賭博をしてゐた」とか、「亂酔してをつた」とか、
 「庭球で喧嘩をした」とか、或は又「さる賣店へ入るのを見た」とか……とい
 ふのは女郎屋のことぢや……其他さまざまの事を言はう。何と如何ぢ
 や？……虚の餌で實の鯉を釣上ぐる。まづ此如く、何が遠見のある智慧者
 は、いつも遠廻りのして間道から本城を陥すことぢや。おぬしも、最前か
 ら言うた通りにして、伴の内情をお探りやれ。合點が往たか、どうぢや？
 合點いたしました。
 堅固でお往きやれ！ さらばぢや。
 御機嫌ようござりませう！

レ
 ボロ
 レ

ボロ 己が眼でも素振を見やれよ。
 レー 心得ました。
 ボロ 好きな音色をば出させたがよいぞよ。
 レー 心得ました。
 ボロ さらばぢや……

レーナルドー入る。

オフィリヤあはたしく入来る。

オフ 何としたオフィリヤ！ 何事が出来たのぢや？
 ボロ お、父上様、々々々、眞に怖うござりました？
 オフ はてさて、何としたのぢや？
 ボロ 父上様、居間で縫物をしてをりましたらなあ、ハムレットさまがな、外套の胸元は開いたまゝ、帽子も着さず、靴下も汚れ、解けた紐は踝へ垂りはうだ

ボロ い、顔の色はシャツほどに蒼ざめて膝がたく、怖しい事を告うために地獄から出された人かのやう、それは情ない顔持して、つい今しがた妾の前へ。
 オフ そもそもに焦れて気が狂うたか？
 ボロ さあ、どうであるか知りませねどな、さうかとも思はれて。
 オフ して何と言はせられた？
 ボロ 妾の手頸をきゆと捉へ、御自身の手を延びるだけ身をそらいて、一方の手を斯う翳し、肖顔畫でも描かうやうに妾の顔をじいと見つめて……



ざりましたが、長いことさうしてゐてから……妾の手頭を軽く振つて、頭を斯う三度上下して……軀も摧け命も盡けうす程に、いとほげな深い溜息をなされてな、それが濟むと手を放いて、肩越に頭だけ此方へ向け、詠めいでも見えるかのやう、目の助けは借らいで外へ出て行かせられた、いつまでも此方を見詰て。

ボロ

さ、おじや。こりや王にお目にかゝらねばならぬわ。それこそは戀の氣狂ぢや、天が下一切の煩惱何れも人間のわづらひぢやが、何がさて戀の激しい特質は、第一に自ら害ひ、果は何様な怖しいことをもしかねぬ。あゝ残念な……え、これ、何か近い頃に彼の君へ無情いことを申上げはせなんだかや？

オフ

いゝえ、何も申しませぬ。したか父上の命令ゆるゑ、お艶書をば突戻いて入らせられても逢ひませなんだわいな。

ボロ

さてこそは氣が狂はせられた。さて……残念や、一段と深しう分別して様子を觀なんだのが脱落ぢや。一時の戯にそもじを疵物にさつしやらうかとばかり思ひ込うだのは、おのれやれ、邪推であつたか！ 南無三寶！とかく老人の過慮と若い者の無分別……さあ、王の御許へ參らう。こりや直に聞上げねばならぬわ。戀の顛末を申したなら、お憎みを受けうも知れぬが、隠しておいたなら尙一段の哀みぢや。さゝ、おじやれ……

入る。

第二場 城内の一室。

喇叭の聲 王妃、廷臣、ローゼンクランツ、ギルダンス、スタン及び侍臣若

千入来る。

王

お、ようこそ、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン！ 久しう逢見たう存じをつたる上に、折入つて頼みたい仔細のあつて、取急ぎ召寄せたわ。灰にはお聞きやつつらうが、打つて變つたるハムレットが此頃、外なる人も内なる人も往時には似ぬ變りやうぢや。かやうに我敷をも忘るゝに至つたる事の因は、父王の死去の外には、何としても思ひ及ばぬ。御身等へ頼とは是の事ぢや、幼いより共に育ち、彼れが若氣の氣心をも善う吞込うでおのやる御身等、暫く當城に留りやつて、近しう相交り、慰事に彼れを誘ひ、吾等の未だ存せぬことにて、聞知らば療治の術もあらんず彼れが病患の原因もあらば、何卒折を得て探出しておくりやれ。

なう方々、御身がたをばハムレットも折々の噂話、御身等程に和子と心の合はん人の又と二人世にあらうとも思ひませぬ。 暫時宮中にお留りやつ

妃

ロ

ギル

王

ギル

て、我等が望を遂げさせう爲に、禮義深切を盡いてたもらば、此度の参内は王の感謝に相應しい報酬をば受けられませう。

兩陛下には、我々に降ませられます無上の大權の持たせられて、御意のまま、嚴命あつてこそ然るべけれ、お頼とは恐入まする。

併しながら、兩人ともに御受の仕り、謹んで微軀を獻じ、力の及びまする限り、忠勤の拔でまするでござりませう。

かたじけなうおじやる、ローゼンクランツ、ギルデンスタアン。

かたじけなうござる、ギルデンスタアン、ローゼンクランツ。さらば直にも見舞うてたもれ、變り果てたわく子を。……誰ぞ、ハムレットがゐやる處へ、兩脚を案内しや。

天よ願はくば我々の参向と忠勤とを王子の御意に稱はしめたまへ、お役に立たしめたまへ！

紀 げにしかあらせたまへ！

ローゼンクランツ、ギルデンスタアン、二の侍臣に案内せられて入る。
ボローニヤス 入来る。

ボロ 申上げまする、お使者がノールウエーより吉報の齎もちいて歸朝きてうつかまつ仕つてござる。
王 足下はいつも吉左右の祖おやぢやわい。

ボロ でござりまするか？ 誓文せいもん、恐れながら、小官神明せいがしんめいに對し奉りましても、陛下かみみに對し奉りましても、本分ほんぶんを守りまするは靈魂れいこんを守りますると一様やうでござる。さればこそ能い探りました……さらすば小官せいがしの此頭腦このづなうは最早昔日もはやせきじつのやうに機敏はしこうは能い嗅出かぎいだしませぬ……いや、正しう能い探りました、ハムレットさま御喪心ごさうしんの眞まことの理由いひはれを。

王 お、語りめされ、それこそは待兼まちかねたわ。

ボロ 先づお使者達ししやたちに拜謁はいえつの仰附おほせつけられませう。小官せいがしが御左右ごさつは其御大饗そのごたいきやうの點

王 心と遊あそばいたがようござりませう。
足下あしもみづから優待いうたいして此處このところへ伴ともなひめされ……

ボローニヤス 入る。

紀 ガアツルートどの、和子わこが亂心らんしんの源泉みなもとを悉く探出さがりいたと申すわ。

覺束おぼつかなう思おもひまする……父王ちわうの崩御ほうぎよとか、吾等われらの早はやまつた婚儀こんぎとか、只大筋ただおほ筋すぢに過ぎますまいぢやまで。

王 へ、何れとも取糺とりたいて見みう……

ボローニヤス 先に、アルチマンドとコオネリヤスと入来る。

アル ようこそ面々めんめん！ してアルチマンド、ノールウエー王わうの返答へんたふは何とぢや？
殊ことなう鄭重ていじゆうなる御挨拶ごあいさつ。はじめの謁見えつけんにて、直様すげさまお使つかひの遣つかはされ、甥なひの殿とのの軍準備いくさよういを差止さしとめられてござります。右みぎはポーランド征伐せいはつの爲ためとのみ思おぼし召めされし由よしの處ところ詮義せんぎの末すゑ、陛下かみみへの御謀反ごむはんと相分あひわかり、さては老病不能らうびやうのうの爲ため

かゝる不覺と歎かせられ、すなはちフォオチンプラス殿召捕のお使者差遣はさる。彼人所詮は命に服し、王のお譴責を蒙り、結局陛下に對し奉つて向後干戈を動すまじくと、叔父君の御前にて誓言ある。老王殊なう御悦喜あつて、年額三千クラウンの知行所を賜はり、且うは徵集められし軍兵を以てポーランド征討の儀差許さる。それにつき委細は此書に(と書面を差出しながら)相見えまするが、何卒右企の爲、當御領内を平和の通行御裁可下されますやうとのお願い、途中の安全を圖りまする條々な此書に認めござりまする。

王 頗る予が意に適うた。間を得て讀んだる上、篤と勘考して返答せん。先づそれまでは兩人ともに太儀千萬、まかんで、休息お爲やれ。夜に入らば共に飲まうぞ。 ようこそ歸朝!

アルチマンド、コオネリヤス入る。

ボロ

此御用向も先づ以て首尾よう。……我君、お妃、そもく君王の稜威とは何ぞや、臣下の本分とは何ぞや、乃至は晝は何故に晝にして、夜は夜なるか、まつた時は時なるかなど、論議ひまするは、是れ只夜や晝や時を徒費するに過ぎませぬ。蓋し簡潔は智慧の精神、冗漫は手足や虚飾でもござりませうによつて、それゆるゑ小官は簡潔に申上ぐる。王子さまはお狂氣、いかにもお狂氣と申上ぐる、何故となれば、豫め狂氣の本義を定めうと仕るなどは、畢竟狂氣も同様の振舞ではござりませぬか? 併しそれはそれと致して……

妃

いやなう、語の潤色よりも肝要の事柄をば。

ボロ

お妃、何の小官が虚辭空言を申しませう。王子お狂氣とは事實でござる。眞に以てお氣の毒でござる、さてお氣の毒でござるが事實でござる。いや、鈍い文飾。併しおさらばでござる、最早潤色は用ひませぬ。すれ

ば先づお狂氣と相定めまして、さて残りましたは吾等が右結果の原因を發明の仕つたる一條……と申すよりも或は右缺陷の原因と申したるが當然でもござりませうか。何故と仰せられい、かやうな缺陷がちの結果は所詮原因無うては叶ひませぬからでござる。これが即ち申し残しで、さて残りました一條は如何でござる。とくと御賢察下されませい。……小官に一人の女がござりまする。……もつとも右は手許に置きまする間の事……其者が孝順にも、お聴下されう、此書をば小官へ渡しました。いざ、御推量下されませう。

ト 艶書を取出して讀む。

「天津姫とも思ふ我魂の本尊、こよなうも艶麗なるオフィリヤの君へ。……こりや拙い、拙い文句ぢや。」「艶麗なる」は拙い句ぢや。ともかくも其後を聴せられませい。かうでござる。

ト 又讀む。

「君のいみじき白き御胸に、これなる句どもを、云々」

それがあの、ハムレットからオフィリヤへ？

ポロ 妃

お妃、まゝ暫く。有體に申上げませう。

ト 又讀む。

「星の火を無しとも思せ。

昇る日を停るとも思せ。

まことをも偽とおぼせ。

しかはあれ、手に二心ありと思すな。

あはれ、なづかしきオフィリヤよ、予は句を綴るに拙し。予は字數を限りて呻吟く術には長せず。さもあれ御身を戀る我心のいと多く切にして更に一切なるを信じたまへ。さらば。

いと戀しき姫へ、此形骸の我有たらん間は、長永に御身の有たるハムレットより。」

此書をば女が命令通り小官に渡しました、のみならず、いつ、いづこにて、いかさまに言寄せられたるかをも悉く申聞えましてござる。

してそれに對するオフィリヤの行動は？

小官をば如何な者とはし思召されまする？

誠忠な名譽の男と。

王 其の通りにありたうござる。さりながら何と思召されませう。……小官

が此激しい戀の羽ばたきを見ました折……こりや豫め申置かいでは適

ひませぬが……女から聞きまする前に、とくにも其儀をば見て取りました

が……何と思召されませう、陛下にせい、お妃にせい、其際小官が机の抽出

か覺帳かのやうに、若し疑と目の瞑つて無言で見過しましたならば……

何と兩陛下には思召されませう？ いや、小官は眞直に着手つて、ま

つこのやうに女めに申しました。「ハムレットさまは王子ぢやぞよ、其方と

は分が違ふ、とつても無いことぢや」とさ申聞せ、王子がお出入の場所々々

へは、かんまへて參らぬやう、お使をも遠ざけ、賜品をも戴くな、と庭訓の

與へましたる所、女め其通りに仕りました。さて王子は撥破けられて……

……手取早う申しますれば……御懣にならせられ、それからして御斷食、

それからして御不眠、それからして御衰弱、それから又御喪心、と自然漸々

と募らせられて、只今の御狂亂、さて……歎かばしいこととござる。

(妃に對ひて) 御事も然おぼさるゝや？

妃 げに、然うもあらうかと思ひまする。

小官が「これは如是でござる」と確つと申上げました際に…… 承りたう

ござる。……それが然うでなうござつたことが、見事、一たびでもござりま

王 予は存せぬわい。

ボロ (頭と肩とへ指さし) これからこれを奪らせられい、萬一にも間違ひましたら、手懸さへござりますれば、どのやうな内密をも、地球の中央に押匿してござりませうと、探出してお目にかけてませう。

王 此上は何として實否を糾さうぞ？

ボロ 御存じの折柄に、わざと王子へ女をば放ちませう。さて陛下と私とが帳の蔭に隠れて、其會合をば窺ひませうす。萬一にも王子が女をば戀はせられず、まつたお心も狂うていらせられぬやうでござらば、小官が職を罷

歩かせられまする。

ボロ げに其通りぢや。

王

さやうの折柄に、わざと王子へ女をば放ちませう。さて陛下と私とが帳の蔭に隠れて、其會合をば窺ひませうす。萬一にも王子が女をば戀はせられず、まつたお心も狂うていらせられぬやうでござらば、小官が職を罷

王 紀

めさせられい、水飲百姓とも相成りませうす。

ボロ ともかくも試みるであらう。

あれあしこへ和子の奴が、いちらしう悄然れて、何やら讀んで來ますわいの。

王 妃、侍臣入る。

ボロ いざ、あちへ入らせられい。 兩陛下とも、いざく。 すぐに物を申掛け

て見ませう。

ハム

はれ、お許されませう。 ハムレットの御前には、如何わたらせられまする

ボロ

お、健康、健康。

小官を御存じでござりまするか？

ハム む、よう存じてをる。魚商ぢや。

ボロ ではござりませぬわい。

ハム なりやせめて彼奴程の正直者であ

つて欲しい。

ボロ 正直者？

ハム 中々。正直者は、今の世では、一萬

人中の一人ぢや。

ボロ これはお道理ぢや。

ハム (讀みながら)「何が故に然云ふ。夫れ

天日の淨き光とても、好んで壞爛の

肉に觸るれば、狗兒の屍に蛆を醸

す。……女をお有ちやつてか？



ボロ ござりまする。

ハム 日中には外へ出すまい。世間をおぼえるは可いことぢやが、ともするも

無分量いことをおぼえる。氣をお附けやつたがよい。

ボロ え、何と御意なされます？……(傍を向いて)まだ女の事をば思込うで居ら

る。したが初手には老生を見知らいで、魚商ぢやなど、申された。い

やも深しう感溺られたことかな、首つたけぢや。いかさま老生とても若

い時分な甚う色戀で苦悶も致いた、ほとく如是にもあつた。今一度物

を言うて見う。……何を讀せられます？

ハム 文句ぢや、文句、々々。

ボロ え、何事でござりまする？

ハム 事とは、そりや誰が？

ボロ いやなに、其讀ませられまする事は何事でござりまする？

ハム 誹謗ぢやよ。悪舌漢めが玆に斯う言うてをるわい、老人には白き髯あり、其面は皺くちやにて、目よりは濃き琥珀色の桃の脂を流す、而して智は夥しう不足し且うは膝節弱くとある。こりやも悉く其通りぢやが、さりとて斯う歴々と書いておくのは、些と無作法であらうわい。何故とお言れ、御身ぢやとて、若し蟹のやうに逆様に這はうならば、予と同年でもあらうによつて。

ポロ (傍を向いて) 狂人の言ふことながら理が立つてゐる。……え、ちと浮世離れを遊ばされませぬか？

ハム あの世へでも行くか？

ポロ なにさま、それも浮世離れでござる。……(傍を向いて) さてはや折々は手際な返答をせらるゝ！ ともすると狂人が旨いことを言ふ、生中正氣の分別があつては、あのよな思切つた不理窟は言はれぬ。今はまづ分れて、不意と

女に出逢さすやうに工夫せう。……恐れながら、これにてお暇を戴きたうござります。

ハム はて、それほど遣したうてならぬものはないわい。……命は別ぢやが、命は命は。

ポロ 御機嫌よう渡らせられませ。

ポロニーヤス 離れる。

ハム うるさい奴の、阿呆め！

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入来る。

ポロ ハムレットさまをお尋かな？ あしここにいらせらるゝ。

ロー (ポロニーヤスに) 御機嫌よろしう！

ポロニーヤス 入る。

ギル 御前様！

ロー 王子様！

ハム おゝ、さてもく、なつかしい！ どうぢやぞい、ギルデンスターン？
……あゝ、ローゼンクランツか！…… 兩人とも、如何ぢや、よい景氣か
の？

ロー 先づ世間並にござりまする。

ギル 仕合せ過ぎませぬといふ意味合で仕合せにござります。 運命の神の帽子
の飾鈕ではござりませぬので。

ハム 女神が靴の底でもないか？

ロー！ でもござりませぬ。

ハム なりや彼の女神が腰の邊取りも直さず御恩惠の中央程にゐるのぢやの？

ギル 眞實 私共には、女神もお目をかけさせられます。

ハム 何ぢや、お目かけ？ あゝ、聞えた、いかさま彼神は淫婦ぢやなう！ 何ぞ

珍聞は無いか？

ロー！ 何もござりませぬが、世の中はおひくと正直になりまする。

ハム すれば世の果も既う近い、が、そりや虚報ぢや。 時に立入つて問はうが、
如何な科ばしあつて、御身等は、運命の神の爲に、如是牢獄へは送られたの
ぢや？

ギル 牢獄と仰せられまするは！

ハム デンマークは牢獄ぢや。

ロー！ すれば此世界とても。
立派な牢獄ぢや。 其中に監禁所もあれば獄室もあり、穴牢もある。 デン

ハム マークは下々の下の一つぢや。

ロー！ 私共はさやうには心得ませぬ。

ハム はて、然らば御身たちにはさうで無いのぢや。 總別思倣しの外には事物

の善も無く、悪も無い。手に取つては牢獄ぢや。

はて、それならば御大望の爲でござりませう。お望に比べては、お國が狭うござりまするでがな。

おっく！ 胡桃の殻に押籠められうと、無邊際の主とも思はうものを、悪夢さへ見なんだなら。

その夢と御意あるが、取りも直さず御大望でござる。何故と仰あれ、所謂大望の本體は夢の影に過ぎませぬ。

夢も影ぢや。

中々、私は大望をば果敢ない、影の影とも申すべき空なもの心得ませぬ。すれば乞食共が本體で、彼の帝王や驕乗り歩く英雄や豪傑は其乞食共の影ぢやとも言はるゝ。……何と、宮中へ行くまいかの、予やもう問答は出来ぬわい。

ロ 陪從 仕りませう。

わつけもないこと。予は御身らをば餘の從臣どもと同列にはしたうない。なせとお言れ、正直に言はうなら、予は世にも怖ろしう奉侍せられてゐるわさ。時に、友達づくに遠慮なう問ふが、エルシノーアへは何しにおじやつた？

ロ 御前をお訪問のために。外に仔細もござりませぬ。

予は乞食の境涯ぢやによつて、謝禮は乏しい、さりながら禮は言ふ、御身らの深切に比ぶれば、一定高價でもあらうなれど。……迎ひを受けたのでは無かつたか？ 自身の好みか？ 全く任意の訪問か？ さ、正直にお言れ。

さゝ、お言れといふに。

何と申しませうやら？

はて、何とでも……只眼目を。呼寄せられたのであらうかの？ それ

〇 御身らの顔の色に、さすが廉恥心の隠しおほせぬ白状の影が見ゆるわ。
兩陛下からお使が参つたのであらう？

何の爲にでござります？

ハム

それを予が問うてをるのぢや。こりや、ローゼンクランツ、ギルデンスタ
アン、友たるの信義を思ひ、諸共に生長つた幼い折の交り、莫逆と契つた互
ひの友誼、其他吾等より辯のよい者が數へ擧げうす微妙友達の本分を思は
い、包まず眞直に、何卒予に話してたもれ、お迎ひを受けたのか、どうぢや？

ロー

(傍を向きギルに)どうしたものであらう？

ハム

(傍を向きて)いや、そちらがさういふ心ならば……(ギルに對ひ)眞情があらば、
お隠しやるな。

ギル

お迎を受けましたのでござります。

ハム

その仔細は予が話さう。さすれば御身らの白状を遮り、他言せぬと御身

〇

らが兩陛下に誓うた義理は秋毫も損ぜぬ道理ぢや。予は近來……何故か
は知らねども……悉く歡樂をば失うたわい、諸藝をも廢てしまつた。能
い堪へられぬ憂愁の、我胸臆に鬱積して、地球といふ此立派なる大組織も、
予に取つては荒れ果てた岬も同然。此空といふ世に美しい天蓋も、あれ、
あの莊麗の穹窿も、燃ゆる黄金を鏝めたる雄大無双の碧落も……はて、我
目には、只もう汚い穢らしい毒瓦斯の漲る場所とばかり見ゆるわい！ 人
間は、ま何たる造化の妙工ぢや！ 理智には秀で、能力には限がない！
風姿といひ、舉動といひ、いみじうもあり、ふさはしうもあり！ 行爲は天
使の如く、智慧は神にも似た此人間！ 世界の華とも萬靈の長とも思ふ此
人間！ その人間が、予に取つては、只の塵埃ぢや。嬉しうない、心に適
はぬ。いや、女とてもぢや、笑ふのは女ならばとお言らうでの？
以ての外の儀にござります。

ハム すれば何故にお笑やつた？ 予が嬉しうない、心に適はぬと言つた時に。

ロー 眞の人間さへお氣に適ひませぬやうならば、人の眞似をする俳優どもは、嘸かしお手薄なお待遇を戴きませうと存じまして。最前彼等をば追越し

ました、程なうこれへ御奉公申上げうとて参りまする。

ハム はて、王の眞似をする奴ならば歡んで迎へくれうぞ。……貢をも献らせう

わい。まつた遍歴騎士には劍と楯の技を揮はせ、情人役も無報酬では泣かせぬ。變人形もあばれはうだい、まつた道外形は、指が觸つても吹出す

やうな輩を存分に笑はせ、女形は四邊かまはいで無遠慮に、若しも言はな

んだら、白の口調がわるうならうず。其俳優とは？

以前御最員に遊ばいた都方の悲劇俳優でござります。旅へは如何して参つたか？ 都方にゐたはうが、名の爲、利の爲によさうなものぢやに。

ロー 御改革で興行が出来ませぬかと存じまする。

ハム 彼等の評判は、予がゐたころに變らぬか？ 同じ様に持囃されてゐるか？

ロー いや、さやうには参りませぬ。

ハム 何として？ もう老込んだか彼等は？

ロー いや、相變らず出精致いてをりまするが、近頃は子供連と申して、鷹の雛のやうに、思切つて甲高に白を陳べまする怖しい人氣の一座がござりまする。

それが當今の流行にて、在來のをば並の劇場などと誹謗の致しまするによつて細劍を佩いた紳士などは、鴛筆が怖うてか、在來の劇場へは先づ足踏

をば能い致しませぬ。

ハム 何ぢや、子供ぢや？ 誰れが扶持をする？ 給料は如何支拂ふぞ？ 其奴

らは甲の聲の出る間ばかり俳優をして居うといふのか？ 格段の工夫も無い分には、彼等とても早晚一度並の俳優とならねばなるまいか、その曉

には、他人に言うたことが取りも直さずおのが後身の悪口ともなるによつて、身で身を害ふも同様と、作者共に苦情をば言ふまいか？

眞實双方の争闘は甚う激しうござりましたが、世人はまたそれを興がり、いろく〜と使喚けまする、それがため一頃は作者と俳優とが口論する一段がござりませねば、其作は賣口が無いと言ふ程でござりました。

ハム 虚事のやうぢやの！

ギル 折々は立廻りをも致しました。

ハム 童連が勝つたか？

ロー 中々、御意の通り。 ハアキユリーズも、所領もろとも、一切降参にござりませぬ。

ハム それも強ち不思議で無い。 叔父御がデンマークの王とならるゝと、父上存生の砌には侮り賤めたる輩までが、叔父御が方寸の肖像書をば、或は二

十金、四十金、乃至五十金、百金をも吝まらずして、争つて購ひ求むる。 あつばれ、是にこそ尋常ならぬ理合があらうす、學問で探られうものなら。

奥にて盛んに喇叭の聲。

ギル 俳優どもでござりまする。

ハム かたぐ、ようこそ此エルシノーアへ。 さゝ、手をく。 東道ぶりの附

物は當時流行の禮式ぢや。 御身たちと斯うしておかぬと、俳優どもへの舉動が、こりや是非とも愛相ようせにやならぬによつて、御身たちに對してよりも一段と鄭重にも見えう程にの。 御身たち、さてようおじやつたの。……したが、叔父ぢやの父も、母ぢやの叔母も、甚い誤解ぢやわい。

ギル え、と仰せられまするは？

ハム 北々西だけが狂うてゐるのぢや、風が南なれば鷹と鷲との見分はつくわさ。

ポローニヤス 入來る。

ボロ これは御兩所、萬福々々！

ハム (ボローニヤスを遠目に見て二人に) こりやギルデンスタアン……御身もく……

ハム ……耳をく。あれ、あの大きな赤兒はまだ襁褓を離れをらぬ。

ハム 多分二度目の襁褓でござりませう、若いには幼兒に返ると申します。

ハム 定、俳優共の事を告に來たのぢや。聽いてゐやれ……(わざと無心として二人

ボロ (相手に) 成程、お言る通りぢや。月曜日の朝、げにさうであつたわ。

ハム 殿下、申上げまする儀がござりまする。

ハム 殿下、申上げまする儀がござりまする。むかしく、ロッシュユースが羅馬の

俳優たりしころ……

俳優共が参りました。

ハム ブズ、ブズ、ブズ！

ボロ 何がさて……

ハム 俳優おのく、驢馬に騎り……

ボロ ……彼等こそは天が下の名優でござる、悲劇にもよく喜劇にも宜しく、歴

史物、山野物、山野がりの喜劇、歴史がりの山野がり、乃至は悲劇仕

立の歴史物、悲劇仕立の喜劇混りの歴史がりの山野がりにもよろしう

ござれば、場面を變へぬ作にも制限の無い作にもよろしい。セネカとて

も重過ぎませず、プロータスとても輕過ぎませぬ。定型物まれ、即興物ま

れ、類無しの技倆者でござりまする。

ハム あはれ、エフタ、以色列の士師……でもおぬしは見事な寶物をお有ちや

つたなう！

ボロ どのやうな寶物を有ちをりました？

ハム はて……
花の娘を只一人、

又無き者とめでけるが……

ボロ (傍を向きて) 相變らず女が事を。

ハム なう、エフタの叟よ、何とさうであらうが？

ボロ 小官をエフタと呼ばせらるゝか、いかさま、小官、女をば一人有ちをります

ハム る、はい、又なきものと愛でをりまする。

ハム いや、さうはならぬわ。

ボロ なりや如何なりますな？

ハム はて……

業因果か神ぞ知る。

その次は

思はぬ事こそ起りけれ。

あとは彼唄の劈頭を見やれ。……もう中止ぢや、あそこへ氣を換へる物が

來たわ。……

四五人の俳優入來る。

おゝ、ようおじやつたの、師匠たち。皆よう來たな。一同達者でめでた

いなう。ようおじやつた。……おゝ、おぬしか！ 先度とは異うて顔に目

覺しい飾が出来たの、こりや予の方から卑下をせにやならぬわ！……や、

若姫御兼奥方ぢやの！ 姫神も照覽あれ、御も久しう見なんだうち、恰ど

繼足の長ほど、天へ近うおなりやつたぞよ。祈禱しや、よ、聲が不通用金

貨のやうに、輪の中へ割込まぬ用心にな。……師匠たち、皆よう來てくれた

の。時に佛蘭西の鷹匠ではないが、見かけたが最期ぢや、すぐに何か一白

聽かうぞ。さゝ、技を見しや。さあ〜何か悲壯な條を。

俳優長 何に仕りませう。

ハム いつぞや汝に或長白を聞いたことがあるが、それは舞臺には掛けられなん

だものぢや。掛けたにせい、一度以上はなかつた。何故なれば、俗は受
けなんだものぢや、彼等には醜態であつた。なれども予が聴いた所、まづ
た此道にかけては超と予に立勝つた人々の評判では、場面も善う整うて巧
妙でもあり穩健でもあるといふ立派な作ぢや。今も記えてをるが、或人
が言うたに、強ひて味を附けうとて薬味を撒けたといふやうな句もなけれ
ば、氣取つた作者ぢやと難癖を附けられさうな文意も見えぬ、いはゞ正路
な作法、口當りも佳いが毒も無い、そして美しうもあるが、拵へすまいたの
ではなうて自然ぢやと言うた。其中の最好もしう思うた長白はエニヤス
がダイドー御前への物語ぢや、とりわけブライヤムの最期を語るあたりぢ
や。まだ記えておるやるならば、此句から始めておくりやれ。かうつと、
かうつと……

「さても荒々しきビルラスは、彼のヒルカニヤの獸のごと」……

さうでは無い。……はじめは「ビルラス」ぢや。

「さても荒々しきビルラスは……ゆゝしき馬腹に臥すからに、心も黒し
腕も黒し、げに烏婆玉の夜かとも、面も頭も爪先も、隈なく塗つたる韓
紅は、主殺さるゝを無慚にも照らす都の兵燹に、焼け凝りたる父よ、母
よ、女の子、男の子の血汐なり、斯く凝血を塗り被つて、眼はさながら
紅玉の、烈火と猛つて鬼ビルラスは、老いたる王をぞ尋ねける」

さて〜お功者なことぢや、抑揚と言ひ、お氣の入れかたと申し。

「やがて彼れに逢ふ。いたはしや老の身の、手馴れし劍も心に任せず、
あしらひかねて立つたる處に、兎を覘ふ荒鷲の、ビルラス颯と驅寄せ
て、猛つて撃てば、靦は外れて太刀風に、よろめきまろふ老人よ！ さ
すが非情の城樓も、此一撃にや感じけん、炎々たる其頂上、雷火と碎け

て落ちければ、ビルラス暫く耳聾ひたり。見よ、白頭の老翁を、斫らんとて揮上げし、劍は空にとゞまつて、畫ける猛者のそれかとも、斫りもやらず、助けもやらず、立縮む。

「さもあらばあれ荒るゝ日に、大空暫く寂寞と、雲は鎮り、風に聲なく、下界も死んだる折ふしに、雷虚空を裂く如く、ビルラスやがて敵意を復し、血汐したゝる大劍を、老王めがけて打下す。神世のむかしサイクロップが不滅の鎧をマーズのために鍛ひに鍛ひし鐵槌とても、よもかばかりには無仁ならじや！」

「につくし、にくし、おのれ淫婦、運命神！ 八百萬の神々よ、あはれ神ばかりに謀らせたまひて、彼奴が力を奪はせてたびたまへや、彼れが有つたる小車の、輜も輻をも打摧いて、残る轂を久堅の、天の丘より鬼住ふ奈落の底まで抛げうちたまへ。」

ボロ

こりや些と長過ぎるわ。

ハム

刈込ませたがよからう、その髯と一しよに。……さゝ、續けておくりやれ。道外節か淫猥話で、も無ければ眠てしまふ男ぢや、さあ〜へキユバの條を。

俳優長

「さはさりながら人誰れか、包める后を見し誰れか……」

ハム

「包める后」?

ボロ

結構ぢや。「包める后」は結構ぢや。

俳優長

「眼ぞ昏む涙雨に、燃ゆる火々消よとばかり、昨日までは嬰珞の懸りし老の額には、あさましや古檻樓、多くの子達を生みまし、其弱腰を纏へるは只一重の毛織物、赤跣足にて彼方此方と走らせたまふを見し誰れか……毒に浸せる舌を揮つて運命神を罵らざる？ 天上の神々も

此有様を見そなはさば、ビルラスが不仁にも彼女が夫を斫り責み、老いたる後の斯くと見て悲み叫ぶ聲音には……人界の哀傷に神の心の動かすばいさ……天つ眼の焰も濕つて、神の御胸も痛まん。」

ボロ あれ、御覽せ、太夫は顔の色を變へ、眼中には涙をさへ湛へをりまする……
(俳優に對ひて)もはや止めておくりやれ。

ハム けつこうぢや。残りはやがて演じて貰を……なう、卿よ、太儀ながら此俳優共を接待してたもるまいか？ えん？ これの、彼等をば懇切に扱うてやりめさ、俳優は當代の粹を見する簡短な活歴史ぢや。死後の碑文は如何あらうとも、息のあるうちに彼等に悪しう寫されぬがよいぞ。

ボロ 相當に扱ひ遣すでござりませう。
ハム はつて、そこそこではならぬわ！ 強ひて相當に扱はうならば、笞をまぬかるゝものが世にあらうか？ 此方の身分相當に相手をば勞りめさ。よ

ボロ 侍遇が相手の分に過うとも、それは恩惠の裕な證ぢや。 伴て往かしめ。 うちへおじやれ。
ハム 従いて往きやれ、明日は劇を観うぞ。

ボロ ニヤスに從いて俳優長の他皆々入る。

ハム こりやく／＼師匠。「ゴンザゴ殺し」をば演じておくりやらうかの？

俳優長 中々、畏まりました。

ハム 明日の晩に演じてほしい。事によつたら、十二行乃至十六行程の白を予が書下いて挿入れうと思ふが、何と暗誦えておくりやらうか？

俳優長 中々、畏まりました。

ハム よしく。あの卿に尾いてゆきやれ。したが弄物にすまいぞよ……
俳優長 入る。ローゼンクランツとギルデンスターアンに對ひ
かたぐ、晩じてから又逢はう。 ようこそ此エルシノーアへはお出でや

つたの。

御前、さやうならば！

ハム お、さらば、機嫌よう！

ローゼンクランツ、ギルデンスターン 入る。

今こそは只一人。 お、何たる無頼漢の土百姓ぞ予は！ さてもく奇
 怪ではないか？ 「あれ、あの俳優が、只假初の假作事の哀傷に、我れと我心
 の底までも感動させ、それがため顔色は蒼ざめ、目には涙を湛へ、見るから
 に物狂ほしく、物言ふ聲も断々續々に、一舉手一投足の末までも其人柄に
 相應さすといふは？ しかもそりや何の爲にか？ へキュバの爲にか？…
 …かくまでに歎き狂ふ彼れに取りて、へキュバは何者ぢや、まつたへキュバに
 取つて彼れは何者ぢや？ 彼れに我有つたる程の大悲憤の因由があり所
 縁があらば、如何な事をなしをるであらうぞ？ 涙を以て舞臺を溺らせ、

怖しい白を以て聴衆の耳を突裂き、覺ある者を狂せしめ、覺無き者をも畏
 れしめ、辨別無き者をも惑はしめて、目をも耳をも騒さうす。 然るに予
 は！ 鈍根愚昧の横道者、拔作鈍太郎のやうに、十二分の理由ありながら、
 徒らに因循し、只一言をも能
 い言はぬ、 王權をも生命を
 も奸賊の爲に失ひたる現在
 の父、國王の爲にすらも。
 予は卑怯者か？ 予を惡漢
 と呼ぶのは誰れぢや？ 我
 素頭を打割り、我髯を笔取つて我面上に叩きつけ、我鼻柱を引振つて予を
 虚言吐、大虚言吐と罵るのは誰れぢや？ 何處の何奴ぢや？
 や！



無念千萬、なれどもその通りぢやと言はねばならぬ、成程予は臆病者で、虐げられても腹を立つだけの意地さへも無いに相違ない、さなくば夙に、彼の人外めの腐肉を以て國中の鷲の腸を肥いた筈ぢやわ。おのれ、荒淫無慚の悪漢！ 残忍非道、不倫醜褻の悪漢めが！

おのれ、此怨！……

はて、予は何たる大阿呆ぢや！ え、立派ぢやわい、奇特ぢやわい、現在の父を殺され、天地共に復讐を責促るに、口先ばかり賣女のやうに氣安めの言句を並べ、只はしたなく咀ひ罵る、腐卑女のやうに……賤婢！

あさましい！ え、あさましいわい！ やい此脳めは活動かぬかい！……傳へ聞く、さる罪惡の覺ある者曾て演劇の見物せしが、巧なる筋立の身につまされ、即座に舊惡を白状せしとか。げに殺人の罪に舌はなくとも、いつかは不思議に露はるゝ。俳優どもに吩咐けて、叔父王が面前に、父が

最期に似通うたる事を演せしめ、顔色に心を着け、彼れが窮所に探を入れう。びくとでもするならば、我取る道は定まる道理ぢや。いつぞや見たる亡靈は悪魔かもはかられぬわ、悪魔は好もしき姿を粧ふといふ。或は予、此日頃、心氣頻に衰勞して憂愁に沈みをれば……かやうな際には、とかく乗せられ易いといふ……陥れう底意かも圖りがたい。確な證據がほし

いものぢや。王が本心を探る手段は演劇の他には無いわい。

入る。

第三幕

第一場 城内の一室

王、妃、ゴローニヤス、オフィリヤ、ローセンクランツ及びギルアンスタアン 入來る。

王 すりや、如何に遠廻しに問試むるも、何故安らかにも送らるゝ身を、かく故意らしう荒狂ひ、人をも危ませ、自らをも苦しむるか、其仔細を申さぬとなや？

ロー 御自身にも御不例とはおつしやられまするが、何故とも仰られませぬ。

ギル 探りまゐらするを好ませられぬげに、とかうして御本心を伺ひまゐらせうと仕りますると、狂人めいた御辯口にて、つと餘所事に紛らさせられまする。

妃 兩卿への待遇は何様でござつたぞ？

ロー いかにも正しいお行儀ぶり。

ギル しかし、何とやらんおむづかしげなる御氣色にも相見えませんでした。

ロー お話は好ませられませぬものゝ、問ひまゐらすれば、十分御返答は遊ばさりました。



妃

何ぞ慰樂を勸めて見てたもつたか？

ロー

さればでござります、參る途中にて、圖らず或俳優共を超越しましたゆゑ、其儀申上げましたる所、どうやらお喜悅の御様子。彼等は既に參向致し、今夕御前にて、何か演じまするやう仰付けられましたげにござります。其通りにござります。兩陛下にも上覽あらせらるゝやう願ひくれいとお言葉にござります。

王

喜んで覽ようす。彼れの心が遊興事へ向うたとは何よりも喜ばしい。：兩卿には此上とも、其志の鈍らぬやう、傍らから介添しておくりやれ。畏まつてござります。

ロー

ローセンクラントとギルデンスタアンと入る。

王

ガアツルードどの、御事も暫し此場を。ふとオフィリヤに逢はせうため、唯今是へハムレットを窃に招かせておいたによつて。ボローニヤスと吾

妃

等とは、法の許す牒者となつて、物蔭に潜み、二人が出會の様子を窺ひ、此中の煩悶は、戀病か、さもないか、舉動によつて判断せうと存する。御意に従ひませう。：：：なう、オフィリヤ、和子の心が狂うたのは和女の標致ゆゑであれかしと念じます。すれば和女の優しい氣立が正氣に返らする縁ともなり、所詮は二人が面目ともなりませうすほどに。御意の通りであつてほしいと存じます。

オフ

妃入る。

ボロ

オフィリヤよ、和女は此邊を歩いてゐやれ。：：：憚りながら、陛下、物蔭に忍びませう。：：：(又オフィリヤに對ひ)此書を読んでゐやれ、さういふ行をしてをれば獨りゐても怪しうは見えない。：：：ともすれば人間は、此つれな不埒をするものぢや。信心らしい面附と殊勝らしい行體で、惡魔根性に口當りのよい外被を掛くる、それがまたそこにもこゝにもあるためしぢや。

王

(傍を向いて) おゝ、全く其通りぢや！ 今の一言は我良心に鋭き筈を加へるわい！ 塗立て、美しげに見ゆる賣女の頬が、紅白粉に比べて穢いよりも、我行は、我極彩色の言葉に比べて、尙幾段も穢いわい。 おゝ、つらやの！

ボロ

見えさせられたやうにござる。 こちへ入らせられませい。

王とボロニヤスと入る。

ハムレット入来る。

ハム

存ふるか、存へぬか？ それが疑問ぢや……残忍な運命の矢石を、只管堪へ忍うでをるが大丈夫の志か、或は海なす艱難を逆へ撃つて、戦うて根を絶つが大丈夫か？ 死は……ねむり……に過ぎぬ。 眠つて心の痛が去り、此肉に附纏うてをる千百の苦が除かるゝものならば……それこそ上もなう願はしい大終焉ぢやが……死は……ねむり……眠る！ あゝ、おそら

くは夢を見う！……そこに障魔があるわ。 此形骸の煩累を悉く脱した時に、其醒めぬ眠の中に、どのやうな夢を見るやら、それが心懸りぢや。 憂世の苦厄を自分と長びかすも、畢竟は此故ぢや。 短剣の只一突で、易々と此生が去らるゝものを、誰がおめくゝと忍うでをらうぞ？ 世の凌虐や侮辱を……虐主の非道や驕る奴輩の横柄や、成就はぬ戀の切なさ、長びく裁判のもどかしさ、官吏の尊大を、堪忍すればよいことにして君子大人をも虐ぐる小人共が無禮ななどを……死後の危惧でもなくば……誰が此厭な世に、汗を流し呻吟きながら、此様な重荷を忍うでをらうぞ？ 曾て一人の旅人すらも歸つて來ぬ國が心元ないによつて、知らぬ火宅に往くよりはと現在の苦を忍ぶのでがな。……まづ此様に、良心は人を臆病者にならする、まづた決心の本の色は蒼白い憂慮に白ちやけ、如何な大事の企圖も、このゆるに逸れ、果は實行の名を失ふ。……(オフィリヤに目を着けて) や、まて暫し！

オフィリヤぢやな！……（オフィリヤに對しなう、姫神、予が罪の消滅をも祈り添へてたもれい。）
まうし御前、此中は如何わたらせられまする？

オフ 忝うおじやる。健康ぢやく。

オフ まうし、御記念の賜物をば、とうから返しまぬらせうと存じてをりました。お受取下されませ。

ハム いや、予は受けぬ、予は何も興した覚えは無い。

オフ 慮外ながら賜はつたを能う覚えて



をりまする。嬉しいお言葉が添うたりやこそ、忝う思うたれ、香が失せ
たからは納めさしませ。心ある者は、いかな貴い寶も、真情が添うてゐね
ばあさましう思ひまする。さ、御前。
は、は、は！ 和女は貞女か？
え？

ハム 美人かよ？

オフ なせに其様なことをおつしやりまする？

ハム はて、貞女でそして美人ならば、貞女と美人とは親しうさせぬがよいといふことぢや。

オフ 貞女と美人となら、好朋輩ではござりませぬかえ？

ハム けもないこと。なせとお言れ、操を墮す美の力は美を引上ぐる操の力の幾層倍ぢや。これが不理窟と思はれた頃もあつたが、今はそれが尋常

ぢや。以前は和女をば可憐いと思つてゐた。

實、妾も然うとばし思つてをりました。

オフ さう思つておゐやつたら大間違であつた。徳はなんぼう接木しても悪し

ハム い臺木の元の氣は脱けぬわ。可憐う思つてはをらなんだ。

オフ すれば甚い思違へをしてをりました。

ハム こりや寺へ往きや寺へ。なんで罪業者を鞠育てうとはお爲やるぞ？ 予

などは随分正直な生得ぢやが、母御が生んでたもらんだらばと怨めしう

思ふ程に、高慢で、執念深うて、野心が激しうて、自身で許さへすれば、澤

山悪事をもしかねぬ、たゞそれを調整へる思案とそれに像を附くる想像と

それを行ふ時と場合とが無いばかりぢや。天地の間に匍匐る予のつれの

ものが何事をか能せうぞい。人は悉く怖しい悪漢ぢや。誰れをも頼に

爲やんな。尼寺へお往きやれ。……父御は何處にぢや？

オフ 宿にをりまする。

ハム よう閉込うておいたがよい、我家でもない所でえせ猿がうをお爲やらぬた

めに。さらば。

オフ (傍を向いて) おゝ、神々さま、王子を救うて賜はりませ！

ハム (行きかけて又戻り) 自然嫁入を爲やるならば、祝儀物の代りに、かういふ呪咀を

與さうぞ。……假令和女が、氷のやうに清浄であらうと、雪のやうに潔白で

あらうと、世の悪口はまぬがれまいぞよ。……寺へ往きやれ寺へ。さら

ばぢや。……(行きかけて又戻り) 又は如何あつても嫁入をするとならば、阿呆

の妻になりや。發明な男は、汝等が如何な怪物と彼等をするかを能う知

つてをるによつて。寺へ、さ、片時も早う、さらばぢや。

オフ (傍を向いて) おゝ、神々さま、お正氣に戻いて賜はりませ！

ハム (行きかけて又戻り) そちたちが紅白粉で塗りこくり、神の下されたの、他に面

を作るといふことも、よう聞いて知つてをる。跳る、品をする、甘たれる、神の作物に渾名を附ける、淫蕩をも無知ゆるぢやと言抜ける。もうく堪忍がならぬわ、予はそれがために氣が狂うた。結婚はもうさせぬぞ。既に結婚した者は、只一人の外、そのまゝにさせておく、餘の者は今のまゝで一生を送らうぞ。さゝ、寺へ。

ハムレット入る。

オフ

おゝ、たぐひない御方の、あさましいお身の果！ 殿上人の眼附に博士の辯舌、武士の武器業、國の花、末の力と皆人に頼れて、風流の鑑、嫉の型と崇められてゐさしましたに、もう無効ぢや、もう無効ぢや！ 生中天の樂のやうな御誓言の蜜を吸うたるゆる、世の中の女子中で最あぢきない身となつたわ！ 盛りの花のお姿も狂亂の嵐に萎れ、高尚いお心も、調子を外いて荒々しう振合いた鈴の様に、ゆかしかつた音色の名残も無い。おゝ、何た

る因果ぢや、以前を見た目で今を見るとは！

王とボローニヤスと入来る。

王

戀ぢや？ いやく戀ではないわい。只今彼れが言うたことは、聊か條理を缺いてをれど、狂人のやうでもない。何か心中に鬱々と孕み育つるものがあるわい、自然それが解つたなら容易ならぬことが出来る。それを先だつて禁むるため、只今咄嗟の思立、多年怠つたる貢物催促のため、彼れを英吉利へ遣すべし、異なる國の山水風物、見るもの聞くものが珍しければ、我歎を忘れ果つるまでに蟠つた惱も解けうす。御身の意見は？ 一段の儀にござりませう。併しお病患の原因は、やはり叶はなんだ戀ゆるぢやと存じます。……どうぢや、オフィリヤ！ あゝいや、王子仰のことは申すに及ばぬ、残らず聞いたわ。……御意の通りに遊ばされませう。したが、御異議なくば、演劇の果ましたる後、御母妃、王子とお差對にて、御

ボロ

る因果ぢや、以前を見た目で今を見るとは！

病患の仔細立入つてお尋問あつたらば如何にござりませう？ 御意により、小官そと傍聞仕りませう。お妃の力にも及びませずば、其折英吉利へなり、まつた御賢慮のまに、幽閉所へなり、お移しあらせられて然るべう存じまする。

王 そのやうにはからはう。位高き者の亂心は打棄てゝはおかれぬわい。

皆入る。

第二場 城内の一室

ハムレット 先に併優等入来る。

ハム 白をば、予が物したやうに、輕うすら〜と言廻いて貰ひたい。例のわざ

とらしい白廻しを聴く程なら、町の呼報者に吩咐けて叫かせたはうが優ぢやわ。まつた手もてこのやうに空を切るまい。總別しとやかに物したがい。畢竟情が高ぶつて、早瀬、暴風、乃至旋風のやうに狂ひ亂るゝ最中ぢやとて、必ず程といふことを學うで、ふくらみを失はぬやうにするが肝腎ぢや。お〜！ 予は彼の荒事師どもが、わつけもない默劇や空騒の外は能う賞翫せぬ土間連の氣を取らうとて、荒廻り叫立つるを観るたびに、何とも堪忍がなりかぬわ。暴風神を演過いたり、暴君を演過いたりするを見ては、打懲いてもやりたいわい。あのやうなことは止めてくれい。畏りましてござります。

ハム ぢやというて穩柔過ぎてもならぬわ。そこはめい〜心を師として、科介に白を合はせ、白に科介を合はせたがい。とりわけ大切なのは、自然の程合を過さぬことぢや。そも〜演劇は、今も昔も、いはゞ造化に鏡を捧

げて、正邪美醜の相容や當國、當世の有りのままを寫いて見する筈のもの
ぢやによつて、度を過ぎては本意に外る。尤も、過不及とも、初心の觀
者は興じもせうが、數千人の客よりも只其一人にこそと日頃思うておね
ばならぬ筈の、其見功者にはあさましう思はれうぞ。然るに、ともすると
人間の役を演じながら、殆ど基督教を信する人間の聲、舉動とは思はれぬ
程に、いや異教徒まつた土耳古人とすらも思はれぬ程に只もう荒狂ひ叫き
立て、恐らくこれは造化翁の傭手めが下手々々と作りをつた人間でもあ
らうかと思はするやうな俳優もある、それをまた方量もなう褒立つる輩も
あつたわ。

俳優長

その邊は随分と改めました心得にござります。

ハム

はて、悉く改めたがよい。次に道外方には定め文句の外は言はずまい
ぞ。ともすると本筋の邪魔となるをば思はで、無智の見物を笑はせうた

めに、我れから馬鹿笑ひをする輩もある。わるい癖ぢや。かやうなこと
を名聞とする道外方は笑止千萬ぢやわい。さう、支度さしめ。

俳優長 入る。

ボローニヤス 先に、ローゼンクランツとギルデンスターアンと入来る。

どうでおじやつたの？ 王には劇をば観させられうかの？

ボロ

お妃も御一しよにて直さま成らせられまする。

ハム

俳優共を急がせておくりやれ。

ボローニヤス 入る。

御身たちも手傳うて催促しておくりやるさいか？

ギル

心得ました。

ローゼンクランツとギルデンスターアンと入る。

ハム

なう〜！ ホレーシオ！

ホレーシオ 入来る。

ホレ お前にをりまする。

ハム ホレーシオ、おぬしこそは予が交際うた人の中の眞の君子人ぢや。

ホレ はて是は何事を……

ハム あゝいや、追従をいふとば

し思ふまい。 高潔な魂の

外には、何一つ衣食の料と

なる収入もないおぬしか

ら、何で予が推舉を望ま

うぞ。 貧者は追従をされぬものぢや。

砂糖浸しの舌は驕る愚人を舐めた

がよし、蝶番の自在な膝は諂うて利のある處で曲げたがよい。 こりや我

此心が物を選分くる主となり、人の性を見別くるやうになつてからは、お



ぬしを常に上もないものと極印を附けた。 何故とお言れ、おぬしは運

命の賞罰を一樣に甘んじ受け、如何な事に出會うても動ずる色が無い。

あゝ、彼神に弄ばれて心にも無い音を出す笛のやうでは無く、血氣と分別

とを等分に備へた手合こそは仕合せものぢや。 情の奴とならぬ男を予に

賜れ、我胸の中央に、底の底に、おぬしと同じに安置して守本尊ともするわ

い。……つい餘計なことを言うた。……今宵、王の前にて、演劇の催す筈、其

中の一場面は、我父の最期の様によろ似てをる。 幕が開いたら、魂を凝し、

叔父者の様子を窺うてたもれ。 若し彼れの隠匿が或一白にだに現はれず

ば、いつぞやの亡霊は悪魔にて、吾々の想像はワルカンの鐵砧ほどにもむ

さくるしいわい。 よう氣を着けて見てたもれ、予も彼れが面を見つめ、後

にて互ひに語りあうて、其上で判断せう。

合點でござります。 演劇の最中にそつとでも目を盗まれましたら、賠償

ホレ

ハム は私がいたしまする。
 はや觀覽に參つた様子ぢや。 予は氣が狂うてゐねばならぬわ。 な、御身も何處ぞで。

デンマークの進行曲を奏する。 喇叭の聲の中に王妃を先に、
 ホローニヤス、オフィリヤ、ローゼンクランツ、ギルデンスターン及び他の公卿
 炬火を携へたる衛兵など入來る。

王 ハムレットや、如何に暮しめさるぞや？

ハム 立派に、實正。 三度の食事が鬼蜥蜴の好物でおじやる。 空氣ばつかり食

うてをる、空約束ともいふわ。 鶏は斯うしては飼はれぬ。

王 何をお言るやら。 それは予への言葉ではないわ。

ハム はて、もう予の言葉でもない。……(ホローニヤスに對ひて) 卿よ、御身はむかし
 大學で演劇を演たとお言つたなう。

ホロ 御意の通り。 しかも上手ぢやといふ評判でござりました。

ハム して如何な役を演じめされた？

ホロ ジュリヤス・シーザーを演じまして、神殿で殺されました。 ブルータスが

殺しをりました。

ハム 何ぢや、嚙取る？ 人の命を嚙取るとは、さて〜虎のやうな奴ぢやの。…

…俳優共の準備はよいか？

ホロ 中々。 御意を相待ちをりまする。

妃 ハムレットや、こゝへおじや、予の傍へすわりや。

ハム いや、母上、こちらの金屬のはうが引力が強うござる。

とオフィリヤの傍へ寄る。

ホロ (王に對ひて) おほう！ あれを御覽じませい。

ハム 暫らく御裳を借させませい。

といひつゝ、オフィリヤの裳裾に近く横になる。

オフ あもし、御前……

ハム はて、裳の裾へちよと頭を載せるばかりぢや。

オフ よろしうござります。

ハム 田舎業でもするとはし思やつたか？

オフ いゝえ、何とも思ひませぬ。

ハム はて、美人の脚間に枕などは善い思附ぢやわい。

オフ え、何と御意なされます？

ハム なにさ。

オフ いかう浮かれてゐさせられます。

ハム たれが、予が？

オフ 御意にござります。

ハム おゝ！ 徒のおことの戯歌作者ぢや。かういふ折に浮かれいで何とせう

ぞい？ あれを見ませ、母君の嬉しさうな顔附、父君がなうなつてから恰

ど二時間ぢや。

オフ いゝえ、もう二月の二倍にもなります。

ハム え、その様になる？ なりや黒は鬼に被せたがよい、予や貂皮でも被てく

れうわ。 あゝく！ 二月も前にお死にやつたのに、まだ世間から忘ら

れもせぬ？ すれば、権門豪族の名は半年位は死んでからも持つと見ゆる

なう。 したが寺でも建てんければ、所詮は彼のひよこすか馬のやうにな

らう。 彼奴の碑文は斯うぢや「見やれ、お見やれ、ひよこすか馬も、いつか

忘れ、棄てられた！」

オフ 木笛を吹く。 黙劇の俳優入来る。

王に扮したる者と、妃に扮したる者といかにも睦じげに擁抱き

あひつゝ入来る。妃は膝まづいて何事か王に對ひて主張する
 介。王は妃を扶け起して其頭におのが頭をもたせかくる、やが
 て草花の咲亂れたる堤に身を横たへる、妃は王の眠れるを見て
 出行く。すると一人の男入来りて王の金冠を奪ひて之に接吻
 し、王の耳へ毒液を注入して入る。妃歸來り王の死せるを見附
 けて悲歎の科介をする。以前の毒殺者は二三の默優を伴れて
 又入来り、妃と共に悲む爲をする。死骸を荷ひ去る。毒殺者は
 何か贈物をなして妃を説く、しばらくは否み嫌ふ介をしたる妃
 は竟に其心に從ひ、共に睡ましげに擁抱うて入る。

オフ

ハム

オフ

あれは何でござりますか？
 はあて、あれは隠匿……悪い事といふことぢや。
 今の默伎が劇の筋でござりますかえ？
 序詞役入来る。

欠

欠

ハム

何ぢや、現在の母親を驚愕させた？ はれ、驚歎すべき忤ぢやの！ 只そ

ロ

れぎりか、驚愕の後段は無しか？ つきましては、御寝なりまする前に、密々御居間にて御對談あらせられう

ハム

との御意にござります。心得た。母上が十層倍母上であつた程にも命に従はうというてたもれ。

ロ

まだ何を御用事がおじやるか？ 御前、以前は小官をば御心友ともおぼしめされたと存じまする。

ロ

今とてもぢや、此双手掛けて。ならば承りまする、なせ御鬱懷にわたらせられます？ 心友と仰せられ

ハム

ながらお包みあるは、御自ら世を狭う遊ばさるゝのでござる。實は、出世が出来ぬからぢや。これはまた異なお言葉。王お納得にて御世子にわたらせらるゝではござ

りませぬか？

ハム それはさうぢやが、草が長びる中に……いや、此諺も最早陳腐いわい。

俳優共笛を携へて入来る。

ハム お、笛か！ こゝへ持て。……こちへ来ておくりやれ。へとギルダンヌダンヌを傍へ伴れゆき。何で御身は予が風上へ廻るのぢや、係蹄に掛けうとでもするやうに？

ギル めつさうな！ 萬一にも慮外の御奉公にござりましたなら、御前を思ひ過しましたる無様にござります。

ハム 何の事やら能う解せぬわ。これをお吹きやるまいか？

ギル 小官には吹けませぬ。

ハム どうぞ吹いてたもれ。

ギル 迎も小官には吹けませぬ。

ハム 頼むと申すに。

ギル でも一向に吹きかたをば存じませぬば。

ハム 虚言を吐くよりは容易い位ぢや。母指と他の指とで、それ斯う此孔どもを壓へて、息を斯う吹込めば、おのづから善い音色を自由自在に發するわい。それ、これが歌口ぢや。

ギル でもござりませうが、それを善い音色の出るやうに扱ふことが出来ませぬ。手心を心得ませぬば。

ハム はて、これは如何ぢや？ すれば御身は予をば一管の笛にも劣る痴者と思うたのぢやな！ いや、現に予を弄ばうとお爲やつたわ。予が歌口を調べ、予が心の奥秘をもあなぐり、ありとあらゆる予が本音をば吐せうとお爲やつたではないか？ 此小かな一管にも、見ん事、いみじい音楽がある、それを御身は能い鳴らさぬといふ。すれば予をば笛よりも弄び易いもの

と思やつてか？ こりや、予を樂器扱ひにするのは隨意ぢやが、其手際では所詮好い音色は出まいぞや。……

ポロニーヤス 入来る。

や、機嫌ようて！

ポロ 申上げます、お妃の御意にござります。すぐさま御對顔あらせられませ

ハム あゝ、あの雲をお見やれ、どうやら駱駝のやうではないか？

ポロ はて、いかさま、駱駝のやうに相見えませるわい。

ハム どうやら駟のやうに見ゆるわい。

ポロ 脊附が駟のやうにも見えまする。

ハム いや、鯨のやうではないか？

ポロ いかさま、鯨のやうにも見えまする。

ハム すればやがて奥へ往かうわ。(傍を向きて)堪忍のならぬほどに阿呆扱ひにし

をるわい。……やがて参るといつてたもれ。

ポロ さやう申上ぐるでござりませう。

ポロニーヤス 入る。

ハム 口でやがてと言ふのは容易い。……かたぐも退つてよからう。

ローゼンクラutz、ギルデンスタアン等入る。ハムレット 一人残る。

今こそ夜の丑三つ時、をは口を開き、地獄よりは毒氣を送る。今ならば熱

血をも能い飲まう、晝が見ば戦く業をも今ならば能い爲さうぞ。ましてし

ばし！ 先づ母上に。……おゝ、心よ、ゆめく本性を失ふなよ。ネロが

魂をば決して此胸に入らすなよ。殘忍の子とはなるとも不孝の子とはな

るまじいぞ。舌をば劍とするとも手に劍を取るまじいぞ、言行表裏といは

うとまゝ。言葉では如何に罵らうと、それに手形をば押すまいぞよ。

第三場 城内の一室

王先に ローゼンクランツとギルデンスタアンと入来る。

王

心に叶はぬばかりではない、かやうな狂人を打棄ておくは、吾々の身の上なれば、御身等に伴はせ、直にも英吉利へ遣さうと存する。急ぎ國書を認めう程に、出立の準備を爲やれ。刻々に募りゆく彼れが狂態、國の爲なれば是非に及ばぬわい。

ギル

支度仕るでござりませう。大君を命の綱と頼み奉る國民の安危を思はせらるゝは、有りがたくも尊い御配慮にござりまする。

ロー

匹夫さへも禍危を避けるためには智慧の限りを盡しまする。まいてや臆兆の生死に係はる上御一人の御身の上。王は單獨にては亡びず、譬へば

王

犬瀧の巻くが如く、またりの一切が引入れられて諸共に亡ぶと申す。若しくは山上の大車輪の如く、自然壊れ落つることもござらば、其巨なる輻の一端に、嵌め添へた限の無数の小器は、悉く破滅をまぬがれませぬ。大君の御歎息な取りも直さず國民の呻吟とござりまする。此上は何卒出帆を急いでおくりやれ。放し飼の狂犬をば、早う鎖に繋ぎたいわい。

ギル

取急ぎまするでござりませう。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

ローニーヤス入来る。

ボロ

申上げます、王子には御母君の御居間へ入らせられます。小官お帳の蔭に潜み、始終を窺ひ奉りませう。一定お妃には厳しう御意見のあらせられませう。最前も御意ありし通り、何が骨肉の御中とて、御最負目も

ありがちなれば、何人か便宜に傍聴仕らんこと至極の御賢慮と存じまする。御機嫌よういらせられませい。何れ御寝前に、伺候いたし、委曲を申上げませう。

王

かたじけなうおじやる。

ホローニヤス 入る。

お、穢き我罪の此臭みは、大空へも達かうわい！ 此世界開けて前先の大逆罪……兄殺し！ え、情なや、祈ることが出来ぬわ。祈りたいと思ふ心は心底より起れども、罪の深さを思ふときは、其覺悟も破れ、一時に二事を行はうとする輩のやうに、あちこちと迷うて何れをも能う果さぬ……よし此呪はれたる手に、兄の血が凝着いて二倍の太さとなつてをらうと、天憐愍の雨を下さば、雪よりも淨うなりさうなもの！ 罪人の身に照臨なくば、大慈悲も何の役に立つぞ？ 祈るときは墮落をまぬがる、まつた墮

落しても救ひを得るとか。此二つの功德がなければ、祈禱の効は無い。さうぢや、此上は神に縋らう。予の科は過去の事ぢや……したか何というて祈つたものであらう？ 非道の毒害をゆるさせられませ？ いやいやこれではならぬわ。殺いて取つた王位、王冠、王妃をば其儘にしておいて、罪だけを免さるゝことが出来うかい？ 此亂離の現世では罪を犯いた手と雖も、黄金で鍍金すれば、正義公道をも曲げ、ともすると非道に得た財貨の力で、國の掟をも買取る。なれども天上の法庭では、何事も見透し、毛頭もいつはることは出来ぬ。此上は何とせう？ 悔懺には如何な罪をも滅すといふ。いで〜悔懺の誠を以て……とはいふものゝ眞の悔懺の出来ぬときは？……お、あさましや〜！ 死の闇にも似た我此胸！ 改心せうと思へども、竊に取られた小鳥のやうに、もがけばもがくほど罪障の元の絆に引戻さるゝ心の苦しさ！ 助けたまへ神々！ 試みませい。

こゝみをれ、頑固な此膝め、やい、鋼
鐵のやうな此心め、赤兒の筋のやう
に柔軟になりをれやい！ 諸願成
就々々々々。

王一隅に退りて膝まづ

きて祈る。

ハムレット入来る。

ハム

今こそ遂げうわ、恰どよし、祈の最
中。いでや怨を……すれば彼奴
は天へ往く！……予は怨を晴らす
？ こりや思案ものぢやわえ。 悪
漢あつて父を殺す、其子其報に件の悪漢を天へ送る、天へ……はて、こり



や備はれ仕事ぢや、復讐ではないわい。 父上、彼奴の爲に、御最期をなさ
れた折は、塵欲尙胸宇に漲り、罪障は彌生の百花と咲誇つてゐたであらう。
人事を推して他世の捌を想像れば、嘸や咎めの重からうす。 それに何ぢ
や？ 今彼奴は後世を祈る最中ぢや、今殺さば極樂へも往きをらう、これ
や返報の法でないわ。……さうぢや、今は討つべき時ではないわい。 酔臥
すか、邪淫に耽るか、乃至は噴毒、毒舌、遊戯、何にてもあれ、御救の道無き
程に魂の汚れたる機を俟つて、横さまに薙倒さば、彼奴が踵は天を蹴つて
黒闇地獄へ眞逆様、永劫の苛責を受けう。……母上のお待兼……暫し命を
延いて置くは只其病ひを長めうためぢやぞ。

ハムレット入る。

王

語は空へ上つても心めが地を離れぬ。 心にはぐれた語は天へは達かぬ。

王入る。

第四場 王妃の居間

妃とポロニーヤスと入来る。

ポロ

やがて入らせられます。お手づよう仰せられませい。餘りと申せば
方量もない御悪戯に、王お腹立あらせられたを、陛下御中に立たせられ、様
々お調停の始終、篤とお物語遊ばされい。いや、もう黙りませう。必ず
共にお手づよう仰せられい。

ハム

(奥にて) 母上々々々々！

妃

心得ました。氣遣あるな。お退りあれ、あれ、聲が聞ゆる。

ポロニーヤス 垂帳の蔭にかくれる。

ハムレット 入来る。

ハム

さて、母上、何御用でござりますす？

妃

ハムレットや、そなたは父君に對して大い不埒をお爲やつたの。

ハム

母上、こなたこそ父上に對して大い不埒をなされた。

妃

はれま、わつけもない返答をお爲やる。

ハム

はて、道に外れた尋ねやうをなさるゝ。

妃

これはしたり、ハムレット！ 如何したものでや？ みづからを見忘れま

したか？

ハム

いゝや忘れませぬ、十字架掛けて忘れぬ。こなたは妃ぢや、こなたの夫の

弟に再縁なされた……忘れられたらよからうに！……現在の母上ぢや。

妃

此上は問答の出来る者を呼うで糺明させう。

ハム

まゝ、お下にござれ、起たせますな。こなたの心の奥底までも鏡に掛け

て見さす程に、そこ一寸もお起ちあるな。

妃 何としやる？ みづからを殺さうでな？……あれ、誰れぞ来て、あれい！

ボロ (垂帳の蔭にて) やあ〜！ 出あへ〜！

ハム (劍を抜きて) や！ 鼠？ こたへたか、うぬ！

と垂帳越しに突く。

ボロ (申にて) お〜！ やられた！

と倒れて息絶ゆる。

妃 お〜、お〜！ まあ何事をお爲やつたぞ？

ハム 何をしたか予は知らぬ。今のは王か？

妃 てもまあ手荒い、むごたらしい何といふ大悪行！

ハム 何、むごたらしい大悪行？ 王たる人を弑しておいて其弟と夫婦になつた

に比べたら、悪行でもおじやるまいぞ。

妃 なに、王たる人を弑すると？

ハム 中々、その通りぢや。

とハムレット垂帳を襲げる、ボ
ローニヤスの死骸現れる。

おのれ、けうこつな、あさましい出過者、
さらばぢや！ 汝よりは目上の者と思
うたに、自業自得ぢやわい。餘りに手
出しや口出しをすれば危いと悟りをつ
たか？……(妃に對ひて)これ、手を振絞る
のを止めさしませ。ま静に！ はてま
あ、お坐りあれ、道理の搾木に掛けてこ
なたの心をこそ振絞つて見せう程に、邪
曲非道に慣らされて、性根が鐵石となつたら知らず、かりにも道理が徹る



ならば。

妃 みづからがどのやうな事をしたればか、現在の母にむかうて其様にはしたなう聲高に？

ハム

どのやうなとは、これ母上。廉恥の面に泥を塗り、淑徳をも偽善と呼ばせ、清淨の戀の額から薔薇の章を剝取つて水腫物を代となし、堅き夫婦の契約をも博徒の誓言と一つにさする御所行ぢやわ！ 神に誓うた約束から其精神を抜去つて、有難い宗教をも謔語とする御所行ぢやわ！ 天もこれを見て面を赤うし、此堅い大塊も、愀然として色を失ひ、世界が今にも滅びるげに憂へ悲む御所行ぢやわ！

妃

これはまあ、なんとたる所行ぢやわ？ 序開から凄じい其見脈

ハム

これ御覽せ、此繪姿と此肖像、血を分けた兄弟ながら、此君の氣高き、立派さ。大陽神の縮髮、デョーヴ神の高額、軍神のやうな此眼には三軍戦き服

すべく、又此立姿は使神マアキュリーが雲に冲る高峯に降立たしたる御風情。姿容の美を集めて、あつばれ人間の鑑ぞとあらゆる神々が極印をば附けさせられたと見ゆる、是れこそ前の御夫。さて此方を御覽せよ、これが今の御夫ぢや。微の着いた麥の穂同然、健かな兄穂を枯らす人非人。母上、こなたは目は無いか？ 此様な美しい山の牧場に飼はれた身で、やうも此様な泥沼で餌をあさらうとなされたな？ こなたはこれでも目があるか？ よもこれを思案の外、戀の習ひぢやとはお言るまい。分別盛りのお年齢、狂ふ血は鎮まつて、事々に辨別のあるべきに、何として此像から此像へお心が移つたぞ？ 情欲のあるからは、一定感覺はおじやらうに、其感覺が麻痺したか？ なんぼ狂うた感覺でも、斯程雲泥と違ふ物を選誤へうほど狂はぬものを。如何なる惡魔が魅入りをつて母上を捉迷藏にしてのけたぞ？ 感はなくも目があらば、目がなくも感があらば、手も目

もなくも耳^{みみ}ならば、何もなくも鼻^{はな}あらば、いやさ、狂^{くる}うた感^{かん}の只^{ただ}一つだにあ
 るならば、これほどまでには惚^ほけまいものを。…お、羞^{しゆう}恥^ち心^{しん}よ！ 世^よの
 中^{なか}に汝^{なんぢ}の血^ち統^{ちゆう}は絶^たえたか？ 邪^{じや}淫^{いん}に老^{らう}女^{にょ}の心^{こころ}も狂^{くる}ふ、血^ちの氣^け湧^わ立^たつ若^{わか}い男^{なん}
 女^{にょ}が、おのが情^ほ炎^{えん}で謹^{つし}慎^{しん}も蠟^{ろう}と溶^{とろ}け、身^みを誤^{あや}まは道^{みち}理^り至^し極^{ごく}ぢや、恥^ちぢしむる
 には及^{およ}ばぬわい。思^{しり}慮^り分^{ぶん}別^{べつ}も邪^{じや}淫^{いん}を勸^{すす}め、霜^{しも}の中^{なか}にも火^ひが燃^もゆるわ。
 妃 お、ハムレット、もう何もいうてたもんな！ そなたの語^{ことば}で始^{はじ}めて見^みた此^{この}
 魂^{たましひ}のむさくろしさ。何^{なん}ぼうしじも落^おちぬ程^{ほど}に黒^{くろ}々と染^{しみ}込^こんだ心^{こころ}の穢^{けが}れ！
 ハム いや、膏^{あぶら}ぎつた汗^{あせ}臭^{くさ}い臥^{ふしど}床^どに寝^ね浸^{ひた}り、豕^{いのこ}同^{どう}然^{ぜん}の彼^{あいつ}奴^{やつ}と睦^{むつご}言^ご…
 妃 お、もう何も言うてたもんな。そなたの言^{ことば}葉^はは劍^{つるぎ}のやうに此^{この}耳^{みみ}を刺^さす
 わいの！ もう何も！
 ハム 極^{ごく}重^{ちゆう}惡^{あく}人^{にん}、人^{にん}非^ひ人^{にん}、前^{まへ}の御^{おん}夫^{をつと}に比^{くら}ぶれば百^{ひゃく}分^{ぶん}一^{いち}にも足^たらぬ奴^{やつ}、王^{わう}の中^{なか}の下^{した}司^す
 役^{やく}者^{しゃ}、國^{くに}を盜^{ぬす}む巾^{きん}着^{やくきり}切^{ひとめ}、人^{ひと}目^めを掠^{かす}め王^{わう}冠^{くわん}をおのが懷^{かくし}中^{ちゆう}へくすねこんだ…

妃 あゝ、もう何も！
 ハム 檻^{つづ}樓^{れい}仕^{した}立^{たて}の乞^こ食^{じき}王^{わう}…

亡^{はう}靈^{れい}現^{あらは}れる。

大^{おほ}空^{ぞら}にまします神^{かみ}々^ぐ、何^{なに}卒^そ我^{わが}身^みを護^{まも}ら
 せたまへ！…如何^{いか}な御^ご用^{よう}あつて尊^{そん}
 靈^{れい}には此^{この}處^{ところ}へ？

妃 かなしや、心^{こころ}が狂^{くる}うたな！
 ハム 身^み不^ふ省^{せう}にして氣^きを鈍^{にぶ}らせ、徒^{いたづ}らに月^{つき}日^ひ
 を過^{すこ}し、嚴^{げん}命^{めい}あつた一^{だい}大^{だい}事^じを遷^{せん}延^{えん}さす
 る腑^ふ甲^が斐^ひなさを御^ご譴^{けん}責^{せき}あらうとて
 か？ お、語^{かた}らしませ。

七^{しち}團^{だん} ゆめく忘^{わす}るゝなよ。こよひ姿^{すがた}を現^{あらは}



いたは汝が鈍つたる決心に研を加へうためぞ。さりながらあれを見よ、
怖れ惑うてをる母が様を！ 孱弱者ほど一段と、我と我身を責め苦しむ
る。懇ろにいたはつて、問ひ慰めい、ハムレット。

ハム 如何なされたぞ、母上？

妃 まあ、そなたこそ如何爲やつた？ 物も無い虚空を見つめて、最前から只

一人で、何事をお言つてぢや？ 眼をば狂人のやうに瞠り、髪の毛は一筋

ひとすぢ、番卒共が驚いて起つたがやうに、伏つてゐたのが皆逆立ち……これ

ハムレットや、上すまい、心をしづめや、氣をおちつけや。 汝は何處を見て

ゐやる。

ハム あゝ、あれを！ あれ、御覽ぜ、蒼ざめたあの顔附！ あのお相で此お怨み、
たとひ非情の木石でも理由を聞いたら震ひ動かう。……あゝ、兒を見させ
らるゝな。 そのやうな惘然や舉動をなされますと、金鐵と誓うた心も鈍

妃 り、血を流す勇氣も萎えて、涙ばかりが落ちませうわい。

そりや誰れにお言る？

ハム こなたには何も見えぬか？

妃 どこにも……何も見えぬわいの。

ハム 聲さへも聞かしやりませぬか？

妃 おいの、お互ひの聲の外は。

ハム はて、それ、あれを！ 音もさせいで影のやうに！ あれ、御覽ぜ、父上が、

ありしにかはらぬ装束にて！ それ、今そこへ行かせらるゝ、あれく最

早扉の外へ！

亡靈消える。

妃 それこそは心の迷ひぢや。 亂心したる折ふしには、ありもせぬ物の形を
上手に心で作るもの。

ハム

なに亂心！ 兒の手の脈は、これ此通りに健全ぢや、こなたのと比較しても
 間拍子が少しも違はぬ。 最前から言うたとの、亂心狂氣で無い證據は、
 さ、お試しあれ、一語もちがへずに言うて見せう、狂人ならば外へ逸れて、
 繰返すとは出来ぬ筈ぢや。 これ母上、後世安樂を願はうとなら、おのが
 邪念に媚びて、良心をば騙さしますな。 おのが罪ゆるとは心づかいで、只
 だハムレットが亂心ゆるとのみ思はしますは、譬へば悪性の腫物が内攻し
 て膿み爛れ、はや一命にもかゝはれど、上邊を包む薄膜に欺されて命を失
 ふに能う似た愚さ。 天に對うて懺悔めされ、過去を悔み、きつと未來をば
 慎ましやりませ。 雜草に肥料を與れて臭い匂ひをば募らしますな。 ……
 ；恕せ、我淑徳よ、澆薄の世の習ひとて、淑徳却つて不徳の前に、語を卑う
 し頭を下げて、許容を乞はねばならぬわい。 やい。

お、ハムレットや、そなたは妾の此胸をば眞二つに裂きやつたぞや。

妃

ハム

お、其一片の悪い方をば抛棄て、残つた善い方で淨い餘生を送らし
 ませ。 さらば御寢あれ。 ……叔父者の臥床へはお渡りあるなよ。 操はな
 くとも、せめて有りげな體をなされ。 習慣といふ怪物は、悪いといふ事を
 つい忘らする悪魔なれど、善い行爲にも四季施を着せて、おひくゝに身に
 そぐはす。 今宵ほどをお忍びあれ、すれば次の夜はやゝ容易く、又其次は
 一段容易い。 習は性をも變へる、悪魔めを壓へつくるか、まつた不思議の
 力を以て、彼奴を放出してしまふは定ぢや。 さらば、改めて御寢あれ。
 冥福を祈らせませ折ともならば、この身もお祝福をば乞ひませうす。 ……
 此老人をば

とホローニヤスを見て

不便なことを致いたわい。 したが、これとても天の配劑、天は之を以て予
 を懲らし、予をかりそめの道具として此奴等を罰せしめらるゝでがな。

死骸をばかたづけて、犯いた罪は身に負はうわい。さらば、お寝あれ……
 (傍を向きて) 只もう爲を思ふゆゑに酷いこともせにやならぬわ。血祭はす
 んだれど、まだ大事が残つてある。……母上、今一言。
 何事をせいとお言る?

妃
ハム

はて、兒が言うたことなどは皆棄て、何なりともなされませい。又も青
 脹れ殿に誘はれて、閨の中の穢い戯れ、頬摺やら接吻やら、汚らはしい手で
 頸を抱きしめられ、いとしいの可愛いのと甘つたるい言葉に騙されて、何
 もかも皆打明け、兒の亂心とても實は計略の爲ぢやとお言れ。はて、何事
 も明いてしまはしやつたがようござる。さうもある筈、稀有な淑女、賢女、
 貞女でいもなくば、誰れが此一大事を隠し果せう? あの狒々に、あの蝦
 蟄に、何の隠し果せうぞい? いや、秘密も分別も要らぬ、寓言で名高い猿
 のやうに、屋背で籠を開けて鳥を逃し、試に籠へ這込んで、おのが首の骨を

妃

打折つたがようござりませう。

氣づかひ爲やんな、言葉が息から出で、息は命から出るものなら、そなたが
 今宵お言つたことをば他言する息も命もおじやらぬわいの。

ハム

兒は英吉利へ往かねばなりません。御ぞんじか?

妃

おゝそれよ、げにそのやうに定つてある。

ハム

既に國書の御印も濟んで、幼友達ではあれど蠅とも思ふ兩人の者が、使節
 の役を承り、予のために行手を拂ひ、まんまと道案内爲よう魂膽。勝手
 にせいぢや。おのが仕掛けた地雷火で打上げらるゝを見るも一興。先
 方で穿つ穴よりも三尺下を此方で掘り、月を目がけ彼奴等をば打上げなん
 だら奇怪であらうぞ。双方の目算が同じ道で撞着さば、それこそは面白
 い。……(へといひつゝ) ポローニヤスの死骸を見て、此男めが用をさせをる。隣室へ此
 食倒を牽いてゆかう。……母上、おさらば。……生きてをつた間は、口數の

多い阿呆であつたが、かうなつては沈毅嚴肅、てもよい顧問官ではあるぞ。さう、おぬしの始末をつけう。……お寝みなされませ。

とハムレットはホローニヤスを摺引りて一方へ、妃は他方へ別々に入る。

第四幕

第一場 城内の一室

王先に妃、ローゼンクランツ及びギルデンスタアン入来る。

王

其歎息は只事でない。仔細は何とちや？ 事情を語りめされ。和子は

何處に？

かたぐには暫し此場を。

ローゼンクランツとギルデンスタアンと入る。

あゝ、もうし怖しい目をば

見ましたぞや！

や、何と？ ハムレットが

何としたぞ？

浪と暴風とが闘ふやうに、

狂ひ騒ぐ狂氣の餘り、物陰

に何者か揺くを見つけ、劍を抜いて走り寄り、鼠々といふより早く、亂心の見分もなう帳の蔭の老人を突殺いてのけました。



王

おゝても忌々しき悪行！ 予若しそこに居合はせなば同じ目にも逢ひつらうぞ、彼れを手放しおくは皆人の身の上ぢや、御身の上も我上も、何人の上も危し。さてもかゝる亂行をば何と國民に分疏かうぞ？ 齡ゆかぬ狂人は、豫め取締り、人交らひなどさすまじきが君父たる者の務ぢやによつて、吾等が非難をば負はねばならぬ。悪い疾に罹つた者が、人の知るを厭うて療治の機を誤り、空しう一命を失ふにひとしく、愛に溺れて吾々もなすべきことをせなんだ報ぢや。して彼れは何處へ往んだぞ？ 死骸を取納めうとて何處へやら。何價値のない岩間にも黄金の脈が燦くやうに、狂氣ながら殺いたとをば、甚う後悔してをりまする。

おゝ、ガアツルード、さゝ奥へ！ 旭光が山の端に觸るゝとすぐさま、船して彼れをば送り出さん。尙こよひの悪行は、我威勢と智慧とを以て、何とか巧みに言拵へ取繕はねばならぬわ。……やあ〜！ ギルデンスター

王 妃

ニー

ローゼンクランツとギルデンスターアンと又入來る。

かたぐには尙餘人を呼集へい。ハムレット狂氣の餘りポローニヤスを殺害し、妃の居間より何處へか引きたり。とう彼れを尋ねいだし、言葉靜に和めこしらへ、ポローニヤスの死骸は拜堂に納めさせい。取急いで計らひくりやれ。

ローゼンクランツとギルデンスターアンと入る。

さゝ、ガアツルード、思慮ある輩を呼集へて、此珍事と共に我所存をも語り聞かせん。世の讒謗は、譬へば石火矢の如く、こなたの端より彼方の端まで轟き渡るが習ひなれども、かう先つて計らひおいたら、規は吾等が名を外いて、毒彈も空を撃たうぞ。さゝ、あなたへ！ 心が驚愕に搔亂さるゝわ。

王と妃と入る。

第二場 城内の他の一室

ハムレット 入来る。

まづこれでよしぢや。

ハム (奥にて) ハムレットさま！ ハムレットの王子さま！

ハム や、あの聲は？ 呼ぶは誰れであらう？ おゝ、もう来たわ。

ローゼンクランツとヤルデンスタアンと入来る。

死骸をば何となされましたぞ？

ハム 一所にしてしまつた親類の土や埃と。

ロー それは何處でござります？ 拜堂へ納めねばなりません、お教へなされませい。

ハム とさ思はぬがよい。

ロー 何とおほせられますか？

ハム はて、足下らの内密ばかりを大事にして、おのがは明放しぢやなど、思はぬがよいといふことぢや。まつた王子ともあらうものが、海綿に問はれうと、どう返答が成らうぞ？

ロー すりや小官を海綿ぢやとおほせられますか？

ハム 中々。王の恩寵やら、褒美やら、官位俸祿、何くれとお吸やるではないか？ したが、さうしたのが王に取つては上もない重寶、足下らを飼うておくのは恰ど猿猴が、頤の隅に栗の實を貯へておくやうなものぢや、取つておいてやがて呑む。まつ其通り、足下らが吸溜めたものが入用となれば、

手間は要らぬ、一掃きうと搾るが最良、海綿はついまた乾枯びてしまふわ
い。

ロ一 一向に解しかねまする。

ハム それで幸ひ。悪舌も抜けた耳にはぢや。

ロ一 もうし、死骸は何處へおかくしなされました。是非共にお知らせあつて、

吾々もろとも陛下の御前へ。

ハム しかばね？ かばねは王と共にあつても、王はかばねと共にはゐね。そ

もく王の物たる……

ギル へ「物」とおつしやりまするは？

ハム はて、何でもないので。案内爲やれ。そりや狐をかくいた、おつかけい。

ハム レット先に皆々入る。

第三場 城内の他の一室

王侍臣を従へて入来る。

王

彼れを尋ねて死骸をば探し出だいて參れよと命じおいた。彼れを手放しお
くは如何にしても危し。さりとして辨別なき愚民らが甚う彼れを愛しをれば、
厳しい刑にも行ひがたい。總別無智の民は遠き思慮を以て是非を判する
ことをなさず、唯目に見ゆる所のみにて粗忽の判断を下すが故に、犯人の
罰重きときは、これを憫むに急にして犯せる罪の大いなるを忘る。事を
滑かに治めうには、卒爾に海外へ出だしやるをも、多年の脚躑と見せねば
ならぬ。危篤となつたる病には危険な療治もせねばならぬ、さなくば……

ローゼンクランツ 入来る。

如何ぢや！ 何としたぞ？

死骸は何方へおかくしありしか、何分にもお明しなされませぬ。

してハムレットは何處にをる？

彼方に。御意を伺ひまするまではと、附添を添へまして。

予が前へ伴ひ参れ。

なうく、ギルデンスタアン！ 王子を此方へ。

ハムレット 先に、ギルデンスタアン 入來る。

さて、ハムレット、ポローニヤスは何處にをる？

今夕食中ぢや。

なに、夕食中？ 何處でぢや？

いや、食うてをるのではなうて、食はれてをるのぢや。 さる蛆蟲共が談合

會を始めて、今恰ど宴會ぢや。 や、蛆といふやつは、ほんに會席の王さま

如何ぢや！ 何としたぞ？

死骸は何方へおかくしありしか、何分にもお明しなされませぬ。

してハムレットは何處にをる？

彼方に。御意を伺ひまするまではと、附添を添へまして。

予が前へ伴ひ参れ。

なうく、ギルデンスタアン！ 王子を此方へ。

ハムレット 先に、ギルデンスタアン 入來る。

さて、ハムレット、ポローニヤスは何處にをる？

今夕食中ぢや。

なに、夕食中？ 何處でぢや？

いや、食うてをるのではなうて、食はれてをるのぢや。 さる蛆蟲共が談合

會を始めて、今恰ど宴會ぢや。 や、蛆といふやつは、ほんに會席の王さま

ぢや。 何故と被言れ、先づ我々人間がおのが食物にせうとて、ありとある

動物を肥らする、そして澤山食べて肥る、さて其肥つた果が蛆蟲の餌食ぢ

や。 すれば肥つた王も瘦さらばうた乞食も、蛆蟲の目からは唯もう種の

違つた獻立、皿は二種でも食ふ口は一つ。 さて、それが結局ぢや。

はれやれ！

すれば王を食つた蟲を餌に魚を釣るまいものでもなし、又其蟲を食つた魚

をば人が食ふまいものでもなし。

何のためにそのやうなことを被言るぞ？

はて、どんなことで王が乞食の腸を巡幸すまいものでもないといふことを

知らせうためぢや。

ポローニヤスは何處にをるぞ？

天に。 使を遣つて御覽せ。 もし其使が能う逢はなんだらもう一ヶ所を

王 御自分でお尋ね。それでも今月中に見つからなしたら、表廣間へ行く道の階子あたりで、彼奴め、きつと匂ひをるであらう。
 それ、表廣間のあたりを探いて見よ。

從臣 二三人急いで入る。

ハム 汝等が往くまで逃げやせぬわい。

王 ハムレットよ、矛深く御事の身の上を案ずるによつて、此度の所行をば甚う歎はしう思ふぞよ。此上は是非もない、火急に海外へ遣さねばならぬ程に、出發の支度を爲やれよ。船も既に準備整ひ、風都合もよし、供奉の輩も今は唯英吉利行の沙汰あるを待つばかり。

ハム すりや英吉利へ？

王 中々。

ハム よろしい。

王 さういはいでは叶はぬ所ぢや、予が好志をお知りやらば。

ハム それを見透しの天使が目に見ゆる。……さ、往なう、英吉利へ！……母上、

おさらばでござります。

王 ハムレットよ、此父にも。

ハム 母上にぢや。父と母とは夫婦ぢや、夫と婦とは同心一體、ぢやによつて母

上、おさらば！……さ、英吉利へ往なうぞ！

ハムレット入る。

王 おぬしらは跡を尾ひ、すかいて速かに船に乗らせい。猶豫は無用ぢや、今宵のうちに出しやらうぞ。あちへく！ 手筈は萬事整うた、必ず共に急いでおくりやれ。……(獨白のやうに)いかに、英國王、足下若し我愛を重んずるならば……往しデンマークの劍瘡がまだ生々と赤きがまゝにて、自ら降參を求めた程に予が威力を知るならば……よも予が命令を冷かには扱

ふまい。委細は書中に認め、すぐさまハムレットをば殺せとある予が嚴命を、必ず遂げよ英國王。彼奴はさながら邪熱の如くに、我血中に荒び狂ふ、それを治するは足下の任務ぢや。此事の遂げらるゝまでは、何ぼうにも我心樂みがたし。

王と共に皆々入る。

第四場 デンマーク國內の平野。

ノールウェーの王子フォオチンブラスを先に一人の旗頭一隊の兵卒を従へて進軍の體にて入來る。

フォ 旗頭、デンマーク王の御許に參つて、フォオチンブラス豫ての御契約

によつて御許の蒙り、御領内を進軍仕ると奏しまわれ。會合の地は心得てをらう。自然御用ともあらば、やがて參朝のせう程に、其儀をも申せ。畏つてござる。しづかに進め。

フォオチンブラス兵をひきぬて入る。

ハムレット先にローセンクランツ、ギルデンスターアン其他の從者入來る。

ハム これは何方の御軍勢でござるの？

旗 ノールウェー國でござる。

ハム 何の爲にでござるな？

旗 ポーランドを攻めうためでござる。

ハム して御大將は？

旗 ノールウェー王の甥の殿、フォオチンブラスどのでござる。

ハム

征伐あるはポーランドの本國でござるか、或は其邊土でござるか？

旗

いや、實を申せば、有體の所名ばかりで何の益にも立たぬ小さい地面を略らうためでござる。唯の五兩を拂うて、餘り借りたうは無い地面、私

領地に賣りこかいたところで、ポーランドの手にも、ノールウエーの手にも、それ以上の金高は入りますまいてや。

ハム

はて、然らばポーランド人は防ぎ戦はうとも致すまい。

旗

いや、既に成の兵を置いてござる。

ハム

二千人の命と二萬兩の金とでは此藁屑の始末は着きますまい。是れぞ國

富みて事無き餘りの膿瘍、外目には見えざれども、内より壞亂して命を奪る……忝うござつた。

旗

おさらばでござる。

旗頭兵をひきぬて入る。

ロ

お出かけ遊ばされませうや？

ハム

やがて追附かう程に、ちと先へお行きやれ。

ハムレットの他皆入る。

見る事聞く事が予を諷めて鈍つた宿志を勵ましをる！ 人間が何ぢや、若

し食うたり寝たりの外に、何一つ一生の大事が無いなら？ 獸類に過ぎ

ぬわい。必定、前をも見、後をも見る此大智見力を賦與せられたからには、

此神のやうな智慧と力とを用ひさせもせいで、銷附かすは天意で無い。

本來予は獸のやうに忘れ易いか？ 又は餘りに思過し、遠く細かに思案す

るゆゑ、それゆゑ決斷がつかぬのか？……我想を四分したなら、智慧は唯

一分ばかりで、残る三分は臆病根性……爲ねばならぬ理由もあり、意も力

も手段までも備はりながら、口に「爲すべし」といふばかりで日を過すは何

の爲ぢや？ 大地程に明白な先例が幾らも予を勵ましをる。あの軍勢を

見い、人数も費用も莫大なあの軍勢を、まだ嫩弱い貴公子が神々しい大望のあればこそ如是に引卒して、見えぬ行末を物とも思はず、有爲無常の一身をば運や死や危険に曝いて卵の殻ほどの獲物を争ふ。大いなる故なくして動かんは偉人の振舞にあるまじいが、大義名分の繋る處には、唯一筋の藁屑の爲にも闘ふべきぞや。すれば予は如何ぢや？ 父を殺され、母を辱められ、理に於ても、情に於ても忍ぶべからざるを忍うでをるとは！ 眼前二萬の壯丁が、予に恥ぢよとばかり、幻影同然の譽の爲に、寢所に往くがやうに、おのが死場所に赴くではないか？ 戦ふ人数を容れかねる程の、戦死した兵卒を埋むる墓地にも足らぬ程の一小土のために！ おゝ、けふより後は、予また心を鬼とせうぞ、さなくば寸毫の價値も無いわ。

ハムレット 入る。

第五場 エルシノーア。城内の一室。

妃先にホレーシオと一紳士役と入来る。

妃 逢ひますまい。

紳士 しきつて拜謁を願ひまする。 全く心亂れし體、不便に存ぜられます。

妃 何を願ふのぢや？

紳士 とかく亡父の事を申しまする。 此世には種々陰謀があるげなゞど、申しては咳拂を致し、胸を叩き、忌々しげに藁を蹴散らし、唯半分だけ意の通ずる曖昧な事を申しまする。 申すところたはいなければ、正體がわかりませぬだけに、聴く者に心あつて、めいゝの當推量、あゝかかうかと補綴沙汰を致しまする。 何さま、彼れが目ませや手眞似や小點頭を致いて曖昧に